

俺はマネージャーだ

クラッカーV

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺の代から共学化した国立音ノ木坂学院

俺が二年に上がるとほぼ同時に、学院が廃校になるという知らせが入った

廃校を阻止する為に立ち上がる三人の女の子達に誘われ、廃校を阻止する為にスクー  
ルアイドルの手伝いをすることに

……俺がマネージャー? よし、ならばとことんやつてやろうじゃないか

# 目 次

志望先は音ノ木坂	139
進学先は音ノ木坂	123
妹の為にグッズを買いに	110
閑話 僕が無表情が嫌いじゃなくなつた	93
理由 2	75
閑話 僕が無表情が嫌いじゃなくなつた	56
マネージャーになりました	46
綺麗な音色に誘われた	27
練習開始	12
反省を活かす為に	1
徹夜明けの朝はキツイ	



# 志望先は音ノ木坂

「…………暑い」

今の状況を例えるのならばその一言で事足りるだろう  
中学三年である俺から見ても風流を感じる木造建築の縁側で、右手にうちわ、左手に  
食べかけのスイカバーを持って寝転がる。吊るされた風鈴の音を聞こうと右手のうち  
わをフル稼働させるが、その努力も徒労に終わった。余計に暑くなつたような気がす  
る。何故俺はあんなことをしたのだろうか

何故こういう日に限つてクーラーが壊れるのだろうか。業者さんもこんな暑い日に  
直しに来てくれるとは大変な。ありがとうございます

…………いや、そもそも物とは何故壊れるのだ？

いやはや、哲学だな

再度起き上がり、目の前に広がる田んぼを見つめながら、この暑さから逃れるために  
スイカバーを齧る

「…………暑い」

だがしかし、やはりスイカバーではこの暑さを吹き飛ばせないようだ。誰か俺に冰山

をプレゼントしてはくれまいか。お願ひ誰か、300円あげるから

「あつ、ソウ兄ちゃん。こんなとこにいたんだ」

後ろから声が掛けられ、振り向くとそこには我が最愛の妹がいた。妹もこの暑さに顔を真っ赤にしながら、薄着なのにも関わらず少し着崩している。今年で中学生になつたというのに、まだまだ恥じらいが足らぬ妹よ

「…………どうした、兄ちゃんに何かようか」

まさかとは思うが、俺に冰山…………とは言わずとも、何か涼しくなるアイテムを献上しに来てくれたのだろうか。だとしたら大した妹だ。兄ちゃんはお前を妹に持つたことを人生の誇りにしているぞ。恥じらいが足らぬとか偉そうなこと思つてすみませんでした

「こんな暑いのに相変わらずのポーカーフェイスだね兄ちゃん…………」

ほつておけ

仕方ないだろう、何故か俺はあまり顔に出にくいタイプなんだから

「それより、何かあつたのか?」

「ああ、そうそう。兄ちゃん、クーラー直つたって

「なに!?」

我が最愛なる妹の言葉に俺はその場で飛び上がった。その際にスイカバーがベ

チャツ、と音を立てながら落ちてしまつたが、庭に落ちたのでまあアリの餌にしといてやろう。喜ベアリ共、今宵はご馳走だ

そんなことよりもクーラーが直つたということの方が大切である

俺は頬に流れる汗を拭い、クーラーのある部屋へマリオもビックリのBダッシユ!!

「あ、兄ちゃん待つてよ!」

「待たん!俺は一刻も早くクーラーに浸りたいんだ!こんな暑い中じやあ受験勉強もままならん!」

「嘘だよね!?志望校すらまだ決めてないくせに!」

走る俺の後ろにピッタリとくつ付き、シャツを引っ張り引っ張られながら走る

玄関から今にも出て行こうとする業者さんに「ありあつしたー!」と二人、声を揃えて挨拶しながら、クーラーのあるリビングへと転がり込んだ  
「す、涼しい…………！」

「天国だよ兄ちゃん…………！」

そこは既にクーラーが稼働し、密閉されていた為もあつてか外よりも遙かに涼しい空気が充满していた。逆に言えば外が暑すぎたんだ。ここはまさに天国、そして外は地獄。もうあの中には戻りたくない

「おお、クーラーよ!あなたはまさに救世主だ!」

「こーらつ！廊下を走るんじやありません!!」

「ふふつ、ソウちゃんもチーちゃんも元気が良いねえ」

寝転がつたままクーラーを堪能してると母さんに怒られ、爺ちゃんから微笑ましいような目で見られた

母さんが俺達の前に立つてゐせいか風が良いように来ない

「それよりも母さん、そこに立たれたら風が来ないんだが」「反省の色が見られないとは…………」

「廊下を走つてすみませんでした。テヘペロ」

「兄ちゃん、無表情でやるもんじやないよそれ…………」

「じやあやつてみ」

「テヘペロ♪」

可愛い

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

いつまでも床に寝転んでいるのもアレなのでそれぞれ、和風なこの家にはミスマッチ

なソファに座る

「はあく…………ほんつとクーラーって最高だね！これを作った人に私はドーナツ一年分奢つてもいいよ」

「ほう…………ドーナツ一年分か

「実は俺なんだ」

「いや、それはないでしょ」

「流石にこの夏に一年分は腐つてしまうからな。冷凍しといてくれないか？」

「ドーナツ一年分奢つてもらう気だ！」

やはりポンデリングは欠かせないな。ポンデリングはうまい。なんであんな輪投げの輪を作るときに、ふざけちゃつてこんなん作つたぜ！みたいな形してゐるのにうまいんだろうか。あの俺には程良い甘さ。あれと一緒にカルピスを飲むと、相乗効果というやつか…………さらにうまくなる

つまり何が言いたいかというと

「ぱないの」

「兄ちゃん、いきなり言うのやめようよ。恐いよ」

「…………すまん」

妹に恐がられて兄ちゃんショックだ…………

「言葉足らずだから悪いのよ、ソウちゃんは」

冷たいお茶が目の前に差し出され、それを受け取る。婆ちゃんだ

「そう言えば総一、高校決めた?」

ゴクゴクとお茶を流し込んでいると母さんから質問が投げられた。俺はもう中学三年生、今年は受験が控えてるが……未だ志望校を決めていない

「適当な進学校」

「つまりまだココ! つて場所は決めてないわけね」

…………そうだな。特別行きたい場所もない

「野球の推薦来るんじゃない? 全部蹴るの?」

「ああ」

高校に行つてまで野球をするつもりは毛頭ない。それに推薦なんて恐らく来ないだろう。目立つたことといえば、ただマグレ当たりで特大ファール打つだけだからな

「ふーん…………そう」

「…………?」

なんだ? 母さんが不敵に笑つたぞ

俺は母さんの顔を訝しげに見ながら残つたお茶を飲み干す。婆ちゃんからお代わりをもらい、再度口を付ける

「じゃあ、音ノ木坂に行きなさい」

「ふむ、音ノ木坂か…………音ノ木坂?!」

「グホツ！カハツ、ケホツケホツ!!」

「大丈夫？ソウちゃん」

「だ、大丈夫。ありがとう…………ワヌスモアアゲイン、母さん」

背中をさすつてくれる婆ちゃんに礼を言つて母さんに向けてもう一度言え、と頼む。

俺の聞き間違いじやなければ、母さんはとんでもないことを言い出してやがる

「だから、音ノ木坂学院に通いなさい」

どうやら聞き間違いじやなかつたようだ

「ちよつと待つてくれ…………音ノ木坂つて確か母さんや婆ちゃんが通つた高校だつたよな？確かにそこは女子校だつたはずだぞ。そう二人とも話していたはずだ」

「おお、久しぶりに見る饒舌な兄ちゃん」

「千尋、ちよつと静かにしてなさい」

そりや饒舌にもなるだろう。いきなり女子校に通えだなんて、あれか？もしかして母

さんは、今まで俺のことを女だと思つてたのか？

「それが、来年度から共学化するらしいのよ」

なん……だと……!?

「またなんで」

「入学者数が年々減つてきてるみたいでね？手遅れになる前になんとかしようつてこと」

「手遅れになる前つて…………いきなり過ぎないか？それに、共学化したところで入学者数がすぐに増えるわけがない。逆効果になる可能性だつてあるんだぞ」

「決定事項にそこまで言われてもね…………でも、いきなりつてわけじやないみたいよ？もう卒業しちゃうけど、モデルとして男の子が数人入つてたみたいだから」

いや、そういう問題じやなくてだな

「そもそも、うちから何個電車を乗り継がないといけないと思つてるんだ。嫌だぞ俺は、そんなの！何より怠いし、朝何時に出ればいいんだ!? 娯楽の時間だつて無くなるじやないか！」

「最後のが殆ど本音でしょ、総一」

「当たり前だ！」

アニメ鑑賞やゲームの時間を削られるなんて堪つたもんじやない!! 部活やつてた頃は寝る時間を削つてまで見ていたが、音ノ木坂に通うとなると眠る時間を削るんじやなく、無くさないといけなくなるじやないか！

「大丈夫よ、一人暮らしきせてあげるから」

「…………なに？」

マジで？

「ノートパソコンも持つて行つていいわよ。これでアニメ見放題ね」

どこからか取り出したのか黒いノートパソコンを取り出してきて俺に見せびらかす  
ように見せる。……マ、マジで？いいのか？

うちに二台ノートパソコンがあると言つても、そのうちの一台を持つて行つても良い  
のだろうか？

「さらさらになに？」

「…………」

ゴクリ、と唾を飲み込む

ま、まさかまだ何かあるのか？ノートパソコンだけでも行くと大声で言つてしまいそ  
うなのに、これ以上のものがあるのか…………!!

「毎日、秋葉原に行けるわよ」

その言葉に、身体中に衝撃が走った

秋葉原、それは俺にとつて夢のような場所。そして聖地。生まれてこのかた、親の出  
身が近くだつたのにも関わらず未だに行つたことのないまだ見ぬ未開拓の地…………！

そこに、毎日行ける…………？

「行く!!」

気付けば俺はソファから立ち上がり、シャキンと手を伸ばしてそう言つていた

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「總一、行くよ」

「……りよ」

「きちんと了解、つて言いなさい」

夏のやりとりから早くも年月が過ぎ去り、受験前日になつた。うちは受験場所の音ノ木坂がある東京都千代田区とは遠く……と言つた程ではないが、結構離れている。始発の電車から乗つていたら間に合わないから、今日から東京にお泊まりだ

その為に現在、駅の改札にいる

ワクワクが止まらない。東京なんて行つたことないからな

「兄ちゃん、受験頑張ってね」

「全力を尽くしてこいよ」

「俺の負けは、ない」

見送つてくれる父さんと我が最愛の妹にサムズアップして俺と母さんは改札を通つた

「それじゃ、レツツゴー！」

「婆ちゃんが言つていた、俺はやれば出来る子だと」

母さんは元気に、俺は某カブトムシライダーの真似をして二人へ手を振つてホームへ向かう

勉強はした。面接練習も先生方から高評価をもらつてゐる。後は今までやつてきたことをそのままやれば良いだけだ

さつきも言つたように、俺の負けはない

# 進学先は音ノ木坂

外に出るとまだまだ肌寒い

現在の時間は午前6時。場所は見知らぬ店の前、名前を『穂むら』と言うらしい明らかに受験会場じやない上にまだ店が開くような時間じやない。こんな時間に受験生を連れ出すなんぞ、うちの母親は何を考えているのか。…………まさか受験会場をここだと思ってるのか？時間的にも場所も外観も全てがミステイクだ

「母さん、ここ違う」

「誰も受験会場だとか思つてないから」

「そうだつたのか…………まあ、普通間違えないよな

「じゃあ、なにゆえ」

「ここ、私の友達の家なのよ」

「なに…………!?」

母さんに、家に遊びに行くような友達がいたのか!?これは衝撃の事実だつ！普段顔には出ないはずなのに、今の俺の顔は驚き一色を示しているだろう  
「なにその驚いた顔。なんで私が友達の家つて言つただけでそんなリアな顔出してんの

よ

「母さんに友達がいる？」「総一？」ソーリーマイマザー」

危ない。母さんの機嫌を損ねたら後で面倒だ

「んじゃ、お邪魔しましようか。大丈夫大丈夫、アポは取つてたから」

「りょ」

いきなり押し掛けるというなら迷惑極まりない話だつたが、許可を取つてゐるならば良いんじやなかろうか。母さんにしてはきちんとしている

意気揚々と中に入つていく母さんに着いて中に入り、中をキヨロキヨロと見回す。聞いていた通り、ここは和菓子屋らしい。和菓子か……くず餅が食いたくなつて來た。まだ開店してないけど、売つてくれるだろうか？まずくず餅があるだろうか

「久美子ちゃん、久しぶり～！」  
「キヤー！久しぶり！」

「……？」

急にやかましくなつた。顔を向けてみると母さんと見知らぬ女性が手を重ねてキヤーキヤー言つてゐる。その後ろには寡黙そうな男性がその様子を微笑ましく見ている

「あ…………もしかして総一君？」

こちらへ飛び火して來た。何故俺のことを……いや、母さんの友達と言うからには、話には聞いているかもな

取り敢えず何か反応を返さなければ

「はい」

「わあ……大きくなつたねえ！それにカツコよくも！前会つた時はこんなに小さかつたのに」

…………なに？会つたことがあるだと？全く覚えてない

いや、それよりもそんな、人差し指の第一関節くらいの大きさだつた覚えはないんだが。それつて俺がまだ母さんのお腹の中にいた時つてこと？そりや覚えてないわ

「あ～…………母さん、説明」

「覚えてないでしようね。前会つた時は生まれた直後だつたから」

何かと惜しかつたぞ！

「そうよ？君が生まれた時は私達も立ち会つてたんだから」

そうだつたのか

「穂乃果ちゃんと雪穂ちゃんは元気？」

「ええ、元気があり過ぎて困るくらいね。あ、穂乃果と雪穂って言うのはね？私の娘達のことなんだけど、穂乃果は今日、君と同じ音ノ木坂学院を受けるのよ」

「へえ」

「ちよ、ガツシリ腕を掴まないでいただきたい。地味に力が入つてちょっと痛いあら、案外筋肉あるわね……」

なんだ、俺はセクハラをされてるのか？

誰か、助けてくれ。勢いに着いていけない。二人の俺を交えたガールズ……いや、ウーマンズトークには

俺は目線をさつきから傍観に徹している男性……恐らくこの人の夫だろう、あの人には投げかける

しばし目を見合わせた後、男性は小さく頷いた

おお、助けてくれるのか……！

と思ったのも束の間、踵を返してどこかへ行つてしまつた

「…………」

いや、助けてくれるんじゃないのか！？

「…………新作だ」

おお、戻ってきた！？

男性が手に持つ皿の上には、半透明の長方形に、黒い液体が掛けられたもの

「おお、くず餅…………！」

まさかのまさかでくず餅が出てくるとは、誰が思うだろうか。まさかこの人、俺がくず餅が食べたいと思つていることに勘付いたのか?!この人、出来る……!!

俺の前に差し出されるそれに、ウーマンズも口を閉じ、それを見る

「貰つても?」

俺が聞くと、また小さく頷いた

皿を貰い、一緒に差し出されたスプーンで黒蜜と一緒に口に運ぶ。どうやら中に餡子が入っているようだ

「うまい…………！」

くず餅の独特な食感、そして仄かな餡子の甘さが黒蜜と混ざりあう。黒蜜があるから餡子は甘さ控えめみたいだ。…………しかし、新作と言うのはどういうことだ?

「けど、これは普通の関西のくず餅では」

「ああ、元々うちにはくず餅置いてなかつたのよ。でも春からは出そうと思つて」

成る程、だから新作か

「他にもある。試してくれるか」

「勿論」

俺は男性に連れられウーマンズゾーンから離れる。いやはや、お礼を言わねばならぬいな。あの中にずっといる気力は俺にはなかつた

…………しかし、いつまでここにいるつもりだろうか？まさかこここの娘さんとやらと一緒に行つてこいだとでも言うつもりか？それはそれで構わんが、その娘が受からなかつた場合気不味くなるような気がするんだが

しかしうまい。このくず餅うまい

「…………受験は、大丈夫そうか？」

「受かるのは決定事項です」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

試食を終え、俺なりの感想を告げたが、まだまだ時間が有り余っている。ウーマンズは飽きもせぬ会話を続け、俺は椅子に座り携帯ゲームだ。受験生だというのに余裕すぎると思われるかもしれないが、今になつて詰め込んでも所詮付け焼き刃。事前に復習程度にペラペラ捲ればそれで十分だ

勉強は積み重ね…………俺は土台ならしつかり出来ている。後は崩れぬよう重ねていくだけ

「おはよー…………」

「あら雪穂、おはよう」

奥から一人、女の子が出て來た。雪穂、と呼ばれていたことから、俺と一緒に受験する娘ではないようだ

「…………あれ、お客様？なんで？」

寝ぼけているのか、目を擦りながらそう言つた

「昨日話したでしょ？私の友達の久美子ちゃんと、その息子の総一君よ」

「お母さんの友達…………と、その息子…………ええ？ちよ、着替えてくる!!」

「ついでに皆を起こして来てね！」

あ、走つて戻つていった

うん、まあ確かに。完全に寝間着みたいな服だつたからな

「皆つて？」

「幼馴染みの子達が泊まつてるのよ。昨日は夜遅くまで皆で勉強してたみたいで」

「へえ…………どつかの誰かとは違うわねえ？総一」

なんだその顔は

「勉強した後は睡眠を取らなきやならない。当日寝不足のせいでミスをしては本末転倒だ。それに俺は必ず受かると何度も言つてるはずなんだけど？」

「はいはい。つたく……人を論破する時は必ず饒舌になるんだから」  
論破する気なら必要最低限喋らねば駄目だろ。超高校級の希望の言弾を撃ち込んでやろうか

だいたい、受験のせいで俺はアニメを見る時間が少なくなっている。仕方ないと言えばそうなんだが…………これも毎日アキバライフのため！俺は自制が出来る男なのだ  
携帯ゲームにもう一度没頭する。これは、アレだ。別に俺の合格は揺るがないのだから大丈夫なんだよ

「自信満々ねえ、総一君」

ふむ、このエリアのボスはどうやって攻略するんだつたか…………ああ、思い出した。  
取り敢えず力でゴリ押しだ

ゲーム機から流れる音楽をイヤホン越しに聞きながら、更に敵ボスの悲鳴を聞き流す。弱い弱い。レベルの差とは圧倒的なものだな

フハハ、バカメー。貴様ノ攻撃ハ見切ツテイルゼ!!

「おはよー！」

「おはようござります」

「おはようございまーす」

まだまだだな。俺に勝つにはお前のレベルを倍くらいにして掛かつてこい

クリア画面を眺めながら一方的な虐殺を終えたので電源を切る。ああ、面白かった  
そう言えば何か聞こえたような気がするが、一体なんだ？

「こちら、昨日話した音ノ木坂を受ける総一君よ」

「何故俺は紹介されているのか

見てみればそこには三人の女の子。真ん中に、如何にも快活そうな、髪を片側で上に  
纏めている……サイドポニーというやつだろうか。何故か知らんが俺を見て目を輝  
かせている

その右側にはたれ目が特徴の女の子だ。真ん中の娘と同じように髪の一部を片側で  
纏めているが、真ん中の娘よりも髪が長い。こちらはこちらで俺を不思議そうに見つめ  
ている

そして最後、左側の娘は長く、綺麗な黒……いや、少し青にも見えるような、そん  
な髪色をした娘だ。何故か警戒されてるような気がしてならない不思議

「……宮野 総一 『みやの そういち』」

取り敢えず自己紹介でもしどおく。急に口を開いたからか左の娘がビクツと反応し  
てた。面白いなあの娘

「私、高坂 穂乃果『こうさか ほのか』！ねえ、宮野君も音ノ木坂受けるんだよね!?よ  
ろしくね！皆で一緒に合格しようね！」

「あ、ああ……」

自己紹介した瞬間に真ん中の娘が俺の側まで素早く移動ってきて、俺の手を取つてブンブンと上下に振る

うおう、なんだなんだ。急にどうした、近すぎんだろ常考。てかこの娘が穂乃果か。なんと言うか、その……親子揃つて似た者同士だな

「穂乃果、近すぎです！初対面の方に失礼ですよ！」

「えく、だつてく……音ノ木坂を受ける仲間なんだよ？」

「南 ことり《みなみ ことり》です。よろしくね」

「よ、よろしく」

「ですが、だからと言つていきなり迫るのは失礼です！」

おい、カオスになつて来てるぞ。誰か収集してくれ

そこの大人陣、何を微笑ましい目で見てる。おい母さん、リア顔とか言つて写真を撮るな

「一緒に音ノ木坂でのスクールライフを楽しもう！」

「気が早いですよ。……すみません、穂乃果が」

「いや、いいんだ」

おお、まさか本人から収集をつけてくれようとは

「私は園田 海未 《そのだ うみ》と言います。音ノ木坂を受けるんですよね？」

「ああ」

「お互い、全力を尽くしましょう」

「そうだな」

「大丈夫だよ！皆受かるよ！」

「頑張つて勉強したもんね」

今にも腕をブンブンと振り回しそうな雰囲気の高坂さんとそれをにこやかに見る南さん。そして園田さん。成る程、真面目系に活発系、その間…………といった感じでなかなかバランスが取れてるじゃないか

三人トモ受カレバイイネー

「それじや、音ノ木坂へ行こ～！」

高坂が元気良く言う。時間からすれば、少し早いような気がするが…………  
「少し早くないですか？」

「お話しながら歩いて行けばいい感じの時間になると思うよ？」

……………そ…う…か、歩いて行かなきやならないのか。怠いな

「私達はここで待ってるから、四人とも頑張つて来なさい」

「はーい！ほら、行こ？海未ちゃん、ことりちゃん！」

「あ、待つてよー！穂乃果ちやん！」

「全く…………ゆつくり行くのではないのですか？」

三人は口々に言いながら店を出て行つた

…………さて、俺も

「このほむらまんじゅうっていうの貰つても良いですか？」

「はよ行け」

解せぬ

「宮野君も早く！」

「俺もか？」

「当たり前でしょ。一緒に行きなさい」

「…………ういっす」

やれやれ、と腰を上げて荷物を肩に引っ提げる。これから受験か……必ず受かる自信があると言えど、怠いな

外に出ると三人娘が俺を待つていた。本当に一緒にいくつもりなのか？初対面なによくそんなこと思えるな。これがコミュ力の違いですか、そうですか。コミュ力とは恐ろしいものだな

「もう、遅いよー！」

「さあ、行きましょう」

「受験頑張ろうね！」

「…………ん」

まあでも、悪くはないのかも知れない

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

俺達は、春から音ノ木坂の制服を着ることとなつた

合格発表で四人同時に合格し、皆でお祝いした。合格することを信じて疑わなかつた俺だが、合格したと実感した時、何故か非常に嬉しく感じた。受験日終わりにも食つたが、穂むら饅頭はやはりうまかつた

あの四人……高坂さんとその妹の高坂ちゃん、園田さん、南さんとは気軽に話が出来る程度には仲良くなつた。三人娘には音ノ木坂の近くや色々な場所を案内してもらつたものだ。いや、元々は俺が牽制してただけなんだがな、高坂さんや南さんがフレンドリー過ぎた。俺の予想以上に

ただ園田さんは少しばかり警戒していたような感じがする。というか警戒よりも慣れてない、という感じだつたな。今ではそんな気配もないがな。スクールライフも問題なく送れそうだ

――――

「そしてこの学院に足を踏み入れたのが一年前、か」

光陰矢の如しとはよく言つたもので、早くも俺は二年生。部活に入ることもなく、この学院には数少ない男友達とアキバに行つたり飯を食いに行つたり、偶に三人娘と学校で駄弁つたり

ホント、ハイスクールライフを謳歌していると言つて良いんじやないだろうか。未だに感情が顔に出にくいいのももはやご愛嬌。どんなに無表情でも、もはや今となつては

清々しい程にスルーされる限りである

今日から新入生も入ってきて、晴れて俺達も先輩。そして後輩が出来る  
先輩という言葉に甘美な響きを感じる、とは友達が言つていたことである。何が良い  
のかわからなかつたので、取り敢えず馬鹿め、とだけ言つておいた  
…………ホントに、矢のようく飛んでいく

### 『廃校のお知らせ』

そして、嫌な知らせとは矢のようくどこからでも飛んでくるものだな

# 妹の為にグツズを買いに

「…………くつそねみい」

朝、目を擦りながらベッドから体を起こす。現在の時刻は…………6時52分。昨日は珍しくも21時には寝たよな、確か。随分と寝たみたいだ

「よし」

頭をガシガシと搔き、ゆっくりとベッドから下りてキツチンへ向かう。IHコンロの上にフライパンを置いてスイッチを入れ、油を取り出してきて投入。少しだけフライパンを持ち上げ、油が全体に行き渡るように傾ける。コンロがビー！ビー！と煩く鳴るが気にしない。ホントこの機能何とかして欲しい。次いで冷蔵庫から卵とハムを取り出し、まずは卵を割つて投下。フライパン上で搔き混ぜてスクランブル。そしてハムを千切つてシューート。朝飯は適当でいいんだ、適当で

「…………」

卵をハムに絡ませながら、俺は昨日のことについて思考を巡らせる

昨日の全校集会、理事長直々に音ノ木坂学院が廃校になることを聞いた

後々こうなるだろうと、若干感じてはいたが予想よりも早いことに僅かに目を見開い

た覚えがある。それからのことはよく覚えておらず、そのまま午後からバイトに行つていつもと何ら変わりもなく帰ったのだろう。何故よく覚えていないのかはわからない。だが一度寝て、そして起きたのにも関わらず胸の中がモヤモヤしているのは何故だろうか

フライパンからスクランブルエッグを皿へ盛る。そして炊飯器を開きご飯を茶碗に

「…………」

ご飯が炊けて、ない…………!!

昨日セットして寝るのを忘れていたらしい。なんたる失態だ……！これでは今日の弁当に白米が入れられないじゃないか!? おかげオントリーとか辛すぎるだろ。おかげあつたらご飯欲しいよ、ご飯。日本人の主食！パンや麺もだけど俺は一番米が好きだ思わず拳を握りしめ、歯をギリイ！と鳴らしてしまう

…………まあいいか、悔しいが朝ご飯はスクランブルエッグだけで。パンは生憎買っていない。母さんも父さんもパン好きだから朝食は殆どパンだつた。毎日食パンは飽きるつての

弁当も今日はコンビニで済ませよう。そうと決まれば早く買いに行かなくては俺が借りているアパートはコンビニが近い。だから懶々チャリやバイクを使わなく

ても行けるのだ。全く良いところを選んでくれたよ、俺の両親は

バイクの免許なら去年の夏に取つた。…………だがまあ、バイクは未だに買つていないが。高いんだよ、アレ。免許持つてゐるのに未だに自転車つて…………いや、気にならなければ。何よりいいじゃないか、免許持つてゐるだけでアレだよ？急に仮面ライダーになつた時とか困らない

ああ、そんなことよりもコンビニに行かなくては。皿に盛つたスクランブルエッグを搔き込んで流しへ滑り込ませ、服装を整えてポケットに携帯を入れて家を出る

外は涼しかつた。朝方だからこんなものだらうと思い、吹き通る風を感じながらコンビニを目指す。このまま走りに行くのも良いが…………それは土日の予定として置いておこう。中学三年間野球部だつた身としては、毎日走り込みや筋トレをしていたが…………最近ではめつきりそれも無くなつた。まあ、流石にそれでは運動不足になるので、土日の二日間だけは運動するようにしている。おかげで体力と筋力の低下がそこまで激しくないようで安心だ

聞き慣れた入店音を聞きながらコンビニに入る。去年から殆ど変わつていないうに見られる品揃えからおにぎりとドーナツを数個ピックアップ。手早く会計を済ませて帰路へ

ブー……ブー……

「…………？」

ポケットが震えた

何事かと見てみると、その正体は携帯のようだ。アラームを設定していたか？……いや、どうやら電話らしい。どこの誰かと画面を見てみれば、そこには我が最愛の妹の名前が映されていた

早速応答しよう。千尋からの電話を俺が無視するわけがない

「おはよう、千尋」

『おはよう兄ちゃん。今大丈夫？』

「ああ」

お前の為ならいつだつて大丈夫だ

『あのね、兄ちゃん。スクールアイドルって知ってる？』

「…………あー」

スクールアイドル…………そう言えばうちの学院の数少ない男子が集まつた時にそんな話題が出たことがある。今はアライズとやらが凄いだとか、あんじゅちゃんが好みだとか、ツバサちゃんのでこ可愛いとか、英玲奈ちゃんこそが一番だろだとか、アライズのメンバーと恋してえだとか、ツバサちゃんのあのでこを触つてみたいだとか…………全く、うちの男子共は変態ばかりだぜ！

結論から言つてアライズのことしか知らん

他にもあるとは聞いたが、残念ながらうちの男子全員アライズさんのファンらしい。  
いや、残念なのか？ そうでもないな

「アライズぐらいなら」

『おお～、やつぱA—RISEは人気だねえ。学校が近くにあるつてのもあるんだろう  
けど』

「UTXとか言うお嬢様学校だな」

『そうだよ』

とある男子が「UTXが共学になつてたらなあ～！」とかほざいていたことがあるが、  
その場にいる全員でちょっとしたリンチが起ころうということがあつたな。そう言えば。  
理由は未だによくわかつていらない。

数少ない男子なんだからもつと仲良くしようぜ。いや、まあ本気のリンチだったわけ  
じゃないがな。流石に後に残るようなことはしない。逆にそのリンチされた奴とは学  
校では一番よくつるんでいる

「それで……？」

『A—RISEのグッズが欲しいの！』

よつしや任せろ

妹に声だけだが、こんな可愛くお願ひされたらそのお願ひを叶えない兄がいるだろうか？いや、いない（反語）

「グッズと言つても種類があるだろう」

『あのね、今日から限定品のCDやバツジが最近開店したスクールアイドルショップで売られるんだって！兄ちゃんは学校があるからもしかしたら買えないかも知れないけど、それをお願いしていいかな？買えなかつたら他の、普通のストラップとかでいいから』

スクールアイドルショップ…………ああ、なんかあつたなそういうの

「わかつた……………個数は？」

『え？一個だけど』

「観賞用保存用布教用と、三つくらいは買うもんじやないのか？」

『兄ちゃん側の人間の基準で話さないでください』

「……………」

なんだ、なんか俺が間違つてるみたいな感じか

「取り敢えずわかつた。限定品を一個だな、種類は問わずか？」

『うん、ありがとう兄ちゃん！』

「お前の為だ」

『うーん、もつと別のシチュエーションだつたらもつとカツコ良かつたかもね。それじゃあ、私朝練あるから！じゃあね！』

「ああ、頑張れよ」

そう言つて電話を切る

折角の妹からの頼みだ。学校を休んで買いに行くのもやぶさかでは…………いや、やめておこう。聞いた感じ、是が非でも欲しいというわけじやなさそうだ。ならば残つていればラツキー、という気持ちで買いに行くしかあるまい。その為に学校を休むことなんて、千尋も望まないだろう

さて、早く帰つて学校の準備をしなければな

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あ、宮野君。おはよう

「おはようございます」

「うつす」

ゆつたりと学校へ登校すると南さんと園田さんの二人と校門前で出くわした。珍しいなと思いつつ挨拶を返すも、そう言えば今日は少し早目に出た覚えがある。あれ、そう言えば高坂さんがいないが…………まあ寝坊でもしたんだろう

「二人も大変だな」

「わかってくれますか……」

「あはは……穂乃果ちゃんがいないだけで伝わるんだ……」

「ここの一年、その理由でしか二人だけで登校したのを見たことがないからな二人に少しだけ同情しつつも、これが三人の主な形なんだろうと思うとちょっと羨ましく思う。俺には幼馴染みと呼べる存在…………しかも、高校まで同じにするような人間がいないからな。こう言つた昔からの関係を持つ人を見ると、素直に良いなと感じる二人よりも歩くスピードが速い俺は必然的に二人を背にしながら下駄箱まで歩く

「宮野君は廃校の件、どう思いますか」

靴を履き替えていると、園田さんからそう聞かれた。ふと園田さんの顔を見ると浮かない表情で俺を見ていた。後ろの南さんも同じような顔をしている

「今のところ、どうとも」

俺は淡白に答えた

廃校と言つても、今すぐにといふわけじゃない。今年の一年生が卒業するまでは実質、この学校は存続していることになる。ただ、卒業してしまえば無くなつてしまふが、そこだけを見れば、無事に卒業出来るのならば問題はない。問題はないはずなんだ

「だけど……いや、なんでもない」

続けようとした言葉を無理矢理引っ込め、上履きへと履き替える

卒業出来れば問題はない。だが、それだけでは駄目だと言つてゐる自分がいる。廃校なんか知らない、興味がない。そう思う度に、俺の心のモヤモヤは大きくなる。そうはつきりと言えない何かが俺の中にはあつた

……  
一体このモヤモヤの正体とは何なのか、まずはこれの正体を突き止めない限りは

「……………ですか」

「園田さんや南さんはどうなんだ？」

「私は、無くなつて欲しくないかな」

南さんは立ち止まり、昇降口から見える景色を見ながらそう言つた。そして俺に向き直り、笑顔を浮かべる  
「だつて、この学院が好きだから」

「……………」

何も言うことが出来なかつた

「私も同じです」

園田さんが南さんの横へ並び立つ。いつも凛としているが、今はより一層その雰囲気を強めていた。まるで胸の内に秘める覚悟と比例するよう

「私もこの学院が好きだから、その為に出来ることはしようと思つています」

「……………そう、か」

たつたその一言を発するのがやつとだつた。一瞬だけ、二人に見惚れたのと同時に  
……………とても眩しく感じたからだ

その眩しさから目を逸らすように体の向きを変え、教室へ向けて歩き出す。そこから  
俺達三人の間には沈黙しかなかつた。教室までの少しの間、僅かな距離を保ちながら歩  
く。教室のドアの前へと来た時、俺は足を止めた

「……………手伝えることがあるなら手伝う。頑張れよ」

それだけ伝えると、途端に氣恥ずかしくなり足早に自分の席まで行つて腰を下ろす。  
お礼を言われた気がするがそれを認識すると余計に恥ずかしくなるので敢えてスルー

「よつす、今日も鉄仮面が冴えてるぜ総一」

「孝太郎……………潰すぞ？」

「何を!？」

目の前の友人からの挨拶に適当に返しておく。内心では未だに結構恥ずかしいのだが……やはりこの顔には全く出ていないらしい。今ほどこのポーカーフェイスを有り難く思つたことはないだろう。俺の顔は本当によくわからない。偶に結構簡単に表情が出る時もあれば、全く、全然と言つていいほど出ない時が大半である。ここでは崩れることはないがな

鞄から筆記用具と教科書などを取り出して机の上に置き、鞄を掛ける。それから俺は目の前の友人、孝太郎と一言二言言葉を交わした。今日いきなり予習が必要だったことを聞いた孝太郎が俺のノートを必死に映しているのが背中越しにわかる

ゆっくりとした動作で頬杖をつき、始業の時間まで俺は窓から見える景色を眺めていた

|||||||

「アイドルだよ！海未ちゃん、ことりちゃん！」

休み時間、穂乃果が数冊の雑誌を手にし海未とことりの席へとパン！と置く。その音に二人は少しだけビックリしながらも、穂乃果の言葉に首を傾げた

「あのね！」

穂乃果はアイドル、という考えに辿り着いた経緯を話す。この学院を廃校の危機から救うには、この学院をアピールして、入学したいという人を増やせば必然的に廃校も無くなるはずである。そして昨日、妹である雪穂が学校から持ち帰ったUTX学院のパンフレットを見てみれば、そこには超人気スクールアイドル、A—R I S Eが。気になり今日早起きしてUTXまで行ってきたのだと言う。寝坊したわけじゃなかつたらしい。なんとも珍しい、と二人は思つてしまつた

そしてふと、ここで海未は悟つた

「(この流れは……)」

不穏な空気を悟ると同時に、熱に浮かされたように話す穂乃果に気付かれぬよう席を立ち上がり、ソロリソロリと教室を後にする。どこぞのポーカーフェイスが海未を一瞥し、それに海未も気付いたが反応している暇もない。休み時間が終わるまでどこかで身を潜めなくては、そう思い引き続き抜き足差し足忍び足、教室から脱出することに成功した

「海未ちゃんどこ行くの!?」

だがしかし、現実はそんなに甘くはない。教室を出て安心したのも束の間、海未の不在に気付いた穂乃果がドアから顔を出し海未の名を呼んだ

「良いこと思い付いたんだから聞いてよー！」

「何が良いですか、どうせアイドルをやろうとか言い出すのでしょうか!?」

「嘘!? なんでわかつたの!? 流石幼馴染み!!」

「誰だつてわかります!!」

やはりか、海未は心の中で自分の予想が当たつてしまつた。こんなに予想が当たつて残念だつたことはそうないだろう

「やろうよアイドル！」

「やりません！」

周りの目を気にせずに「やろうよー!」「やりません!」の水掛け論。周囲もなんだなんだと二人のやり取りを眺めている。そして、その終わりを迎させたのは海未だつた  
「その人達は並々ならぬ努力をしたからこそ今があるのですよ!? 穂乃果のように思い付  
きでやつてみるのとは訳が違うのです!! はつきり言います…………アイドルは無しで  
す!!」

「そんなあー…………」

WINNER 園田 海未

勝敗が決すると共に周りのギャラリーも引いていく。勿論その中にはことりと鉄仮面の姿もあつた。海未は二人の元へ歩き、そろそろ始業の鐘が鳴るので教室へとことりと共にに入る。その際ことは、先々と教室に入つていく海未を追い掛ける前に総一へ耳打ちする

「もしもの時はお願ひね」

美少女に耳打ちされても鉄仮面が剥がれない総一。いがつて いるのだが、表情に出ない限りわかる人もいない「もしもつて……なに」

ことが教室へ入るのを見送った総一は呟いた

「宮野、席座れよー」

「はい」

授業をしに来た教師にそう言われ、返事を返して総一は教室へと入つていった。

そんな訳で放課後。何がそんな訳なのかわからないが放課後である

「よし」

総一は一人、秋葉原にあるスクールアイドルショップへと来ていた。最近出来たからかはわからないし時間帯も関係しているのか、人の出入りが多い。だがやはり、学生が圧倒的割合を占めているようだ。総一の知らない制服を着た女子、一度家に帰ったのか私服で品物を見ている男子、見た目が如何にもオタク然とした男から眼鏡の女の子に引つ張られる、語尾にニャーと付ける同じ学校の女子までいる

「か、かよちん待つにや～！そんなに急がなくても大丈夫だよ～！」

「もう売り切れちゃってるかもしねないんだよ!?」

店の入り口には大きく今超人気のスクールアイドル、A—R I S Eのグッズが置いてある

「へえ、A—R I S Eって書くのか」

その名前を見つけそう呟く総一。A—R I S Eのメンバーである三人が映ったポスターを少しだけ眺め店内へと足を運び入れる。店の中から流れる音楽はどこのスクールアイドルのものだろうか、そんなことを思いながらお目当ての物を探すべく一層賑わいのある場所へと進んだ

A—R I S E のグッズは店に入れば、入り口付近からでもよくわかる程大きく見出しがある為に分かり易い。A—R I S E のグッズが並んでいる前へ、帽子を目深く被つている人と並ぶように立つ

「流石は、人気アイドル」

殆どが売り切れ掛けているのを見て総一は内心驚きながら、運良く残っていた限定グッズを一つ手に取る。そこに描かれているのはおデコがチャーミングなA—R I S E のリーダー、綺羅 ツバサちゃんであつた

「おデコ……ツバサちゃんか」

おデコですんなりと名前が出て来たようだ。なんと言う覚え方だろうか、例えチャーミングポイントだと言つてもその覚え方はあんまりではないだろうか。ここに本人が居ればどんな反応を示すのだろう……いや、そこはアイドル、笑顔を浮かべてくれるに違いない

「おデコつて……覚え方、おデコつて……」

「…………？」

横の、帽子を目深く被つた人が総一の言葉に反応してか呟いていた。それを不審に思つた総一は少し思考を巡らせる。総一は普通よりも耳が良い方だつた。それだけに横の人の小さい呟きも聞こえてしまつていたのだ

「まさか、ファンの人を怒らせてしまったのか…………？おデコが悪かったのか…………。いや、でも話に聞いた限りじゃあおデコとしか聞いてないような？てか、おデコを売りに出しているんじやないのか？でも、俺的に印象に残る場所がどこかと聞かれたら……）…………やっぱり、おデコしかないな」

総一なりに必死に考えてみるがやはり総一の知る綺羅 ツバサちゃんとはおデコが出てているアイドルというイメージしか持っていない。故にどこまで行つてもおデコである。これは何も総一が悪いわけではなく、おデコばかり話していた総一の友人が悪いわけであり、実はおデコ以外にも話していたがそれを聞いていなかつた総一も悪いわけであつたり…………結局どちらも悪いことが証明されてしまつた、驚きである

そして最後、口に出してはいけない気がするのは気のせいでもなんでもないことを隣の帽子の人裏付けていた

「（ううむ、早目にここから離れた方が良さそうだ）」

そう結論付けて適當な限定グッズを複数個取りレジへ急行する。一体あの帽子の人は何だつたのか、長い間解けぬ謎になりそうだ。別段解くような謎でもなかつたりするのだが

「しかし、限定品を買ってよかつた」

店の外へ出てホツと安堵の息を吐く。頭の中では妹の喜ぶ顔、その顔を思い浮かべ内

心だけでニヤけるというわけのわからない状況になつてゐるが、顔に出ないのだから  
しようがない

帰つて早速妹に報告だと意氣揚々と帰路に……

「ちよつと良い?」

つく前に誰かに呼び止められた

「…………?」

一体どこの馬の骨が我が道を邪魔するのか、そんな益体もないことを考えながらも顔  
だけを向ける縦一。無表情がゆつくりと振り向く様はなんだか見る人から見れば少し  
恐いものがある

「(げ…………)」

見てみればそこにいたのは、さつき何やら眩いでいた帽子を目深く被つた人だつた。  
よくよく見てみれば体付きから女性だということがわかる

「これ、A—R I S Eのライブチケット」

短く発せられた言葉と共に、目の前に一枚の紙切れが差し出された

「…………何故俺に?」

帽子の女性の行動がよく理解出来なかつた。それもそうだろう、恐らくこの女性はA—R I S Eのファン、そんな人が何故何の繋がりもない縦一にそんな大層な物を渡すの

か

「えーっと…………実は当日に用事があるの。代わりに行つてくれない？」

「だから何故」

帽子のツバを更に下に下げながら言う彼女に更に追い討ちをかけた。誰だろうと容赦のない鉄仮面である

「…………取り敢えず、必ず来て。おデコだけじやないつてことわからせてあげる」

「どういうこと…………あ、おい」

チケットを強引に押し付けて足早と去つて行く彼女を追いかけようとするも人混みが邪魔になつてなかなか進めなかつた。何故彼女はあんなにスルスルと進んで行けるのか甚だ疑問に思いながら、手に握り締めさせられたチケットをどうするかを考える（…………今週の土曜か。千尋にでも…………俺に渡されたんだから俺が行くべきなのかな？ 確か土曜はバイトのシフトが…………いや、ズラして貰えればいいか）

強引にとはいえ意外にも律儀に行くことを決めた総一。無くさぬように財布の中にチケットを入れる

「しかし、物好きな人もいるな」

帽子を目深く被つたあの女性に対し、物好きなどと印象付けて帰路へ着く。またどこかで出会いそうな、そんな奇妙な可能性を感じながらアキバの街を歩き出した

# 閑話　俺が無表情が嫌いじゃなくなつた理由

「お先に失礼します」

「おーう、今日もお疲れちゃん」

「気を付けて帰つてね！」

今日のバイトは終わつた。いつもお世話になつてゐる店長や先輩方へ挨拶を済ませる

いやあ、今日も頑張つた。高校生になつてバイトを始めて早数ヶ月…………学校でできた友達の家であると言うこの喫茶店『バース』に雇つてもらつたのだが、最初は不安で仕方なかつた。今ではそんなこともないがな

「あ、そうだ。総一君」

「……？　はい、なんでしょう」

店を出ようと思つたら店長の奥さん、さくらさんに呼び止められた

「実は今週の土曜日、私と明さんにちょっと用事ができちやつて」

頬に手を当てながら少し困つた顔を作つて言うさくらさん。一児、しかも俺と同い年

の息子を持つているというのにお若い限りです。全く、最近の母親はどうなつてゐるんだ?  
? 友穂さんと言ひ、さくらさんと言ひ、うちの母親も見習つて欲しい  
……いや、まあ若い部類には入るんだがな。見た目は

しかし、土曜日に明さんとさくらさんがいなかののか。確かに土曜日は……8月3日  
だつたな。シフトも入つていなかし、入つて欲しいと言うお願ひだらうか?

「その日、孝太郎と二人だけでお店番頼めないかしら?」

…………は?

「孝太郎と二人だけ…………?」

ジャストモーメントですさくらさん。二人だけつてなんの冗談ですか? ここ喫茶  
店つて言つても、二人で回せるようなもんじやないですよね? 丁度孝太郎はホールで、  
俺は厨房ですが、明らかにバイト始めて数ヶ月の人間に任せて良いもんじやないです  
よね?

「他の先輩方は…………」

俺は助けを求める為に先輩方の方へ目を向ける

「俺もその日用事があるから無理だわ。頑張りたまへ、ソウ君」

「ソウ君はやめてください関根先輩。…………山田先輩」

「私も用事があるから無理なんだよね。ごめんね?」

「そ、そんな…………」

「このこと、孝太郎は？」

「ダーダイジヨブダイジヨブ、そんな心配すんなつてソウちゃん」「ソウちゃんもやめてください、店長」

軽快な男性の声が厨房から響いて、その後に店長が姿を現す。いや店長、ダイジヨブ言いますけどダイジヨブじやないですよ

「ソウちゃんも頑張つて、早くこれだけ稼げるようになんかきやな！その為の練習だと思ひな」

店長は人差し指を立てて俺に笑顔を見せてくる。そんなイケメンな笑顔を見せて貰つても納得出来ませんよ。それに一億も稼ぐ気なんてありませんからね？俺はいや、でも欲しいかと言われば欲しいかな

「…………わかりました。どうせもう決定事項なんですよね？」

「ありがとね。総一君は嫌な顔一つしないから嬉しいわ」

「いや、嫌な顔が出ないだけです」

…………そうだ。生まれてこのかた、俺の顔には感情が出にくい。出たと思えばただ目を見開いて驚いただけの顔だつたり、精一杯変わつても、眉を寄せるぐらいだ

それこそ、笑つたことなんて記憶にない

「いつつも無表情だよなー、ソウちゃん」

「…………それについては触れないでください」

俺だつて気にしてるんだ

「ああー……、悪い」

やべ、少し語氣を強くしてしまつた

「いえ、こちらこそすみません。それじゃ」

俺は逃げるようすに店から飛び出した。あそこにいても、氣不味くなるだけだつただろうから

「…………甘いもん、買いに行くか」

そうだ、和菓子が良い。和菓子が食べたい。『穂むら』の饅頭が、食べたい

ブー…………ブー

「…………？」

携帯が鳴つた。こんな時に、一体誰だろうか?と言つても、掛けてくる人なんて少ないのだけれども

『もしもし、総一?』

『…………もしもし』

母さんからだつた。またくだらない用事だろう、そう当たりをつけて応答すると母さんの変わらぬ声が聞こえてくる

今はあまり気分が優れない。出来ることなら早々にこの電話を切つてしまいたいのだが

『今週の土曜日ね、実は穂乃果ちゃんの誕生日なのよ? 知つてた?』

「へえ、そうなのか』

『と言うわけだから土曜日、予定開けときなさいね。穂乃果ちゃん楽しみにしてたわよ

♪♪』

「.....」

何が、と言うわけだから、なのか非常に理解が出来ない

『穂むら』へ向かう途中、母さんから着信が来たと思えばこれだ。大体の概要是理解出来た。ただ、どうしても納得がいかないし、既にこちらはバイトのシフトが入つてしまつたから無理だ

「高坂さんの誕生日を祝うのはいい。なんでもつと早くに連絡して来なかつたんだ

『ああ、ごめん。後から連絡入れようと思つて』

.....まあいい

「遅い。もうシフトが入つてる。昼からキツカリ」

『ズラしてもらえば?』

「無理」

『ええ?! ジヤあどうすんの!!』

俺が知るか。大体、本人に確認も取らずに話を進める母さんが悪いんじゃないのか?  
自然とイライラが募る。足元にあつた小石を蹴飛ばした。幸いこの通りは誰も人が  
通つておらず、猫一匹いやしない。苛立ちのままにもう一度近くにあつた石を蹴り、舌  
打ちをする

「どうするもこうするも……なんで先に俺に連絡入れなかつたんだ」  
『だから、後で入れようと……』

「俺がバイトしたことぐらい知つてるだろ!! 土曜日にシフトが入ることくらい、予  
想出来るんじやないのか!」

『…………ごめん』

「…………」

小さくなつた母さんの声を聞いて、沸騰した頭がゆつくりと冷静さを取り戻していく  
久しぶりに声を荒げた。普段あまり大声は出さない方だと自覚はしている。少し、怖  
がらせてしまつたかもしれない

「取り敢えず、高坂さんの誕生日には何かプレゼント用意するから、それを持つて行つて

納得してもらつてくれ。後から俺からも謝つとくから」

それだけ言つて、返事も聞かずに通話を終了させ、ゆっくりと耳元から携帯を下ろす。右手に握る携帯の、黒くなつた画面に視線を向けると、いつもの無表情がそこにあつた。画面に映る自分に目が合う。きっと、さつき声を荒げた時もこの顔だつたんだろう。そう思うと途端にこの顔が憎らしくなり、なんならもういつそのこと笑顔の形でも作つて、何かで固めてしまえば良いんじやないかと思つた

…………どうやら俺は、この顔が嫌いみたいだ

「ふう……」

溜息を吐いて、『穂むら』へ向けて歩き出す。この角を曲がればすぐだ

ゆつくりとした足取りで角を曲がると、すぐ側に『穂むら』の看板が見える。その下を通り、入り口の戸を開けて中へ入るとここ数ヶ月、何回か通つて見慣れてしまつた店の風景があつた。カウンターでは友穂さんがお団子を摘み食いしている

「ん、あら……いらつしやい、総一君じやない。お団子食べる？」  
「いえ」

友穂さん、それ売り物なんじやないですか？

「そう……今日はどうしたの？お買い物？安くしとくわよ♪」  
「ありがとうございます。それじゃあ、穂むら饅頭を一箱」

「はい、毎度ありがとうございます。穂乃果や雪穂なら家にいるわよ。上がつてく？」  
ぐ……今一番会いづらい人の名前を……！

どうする。このまま言つておくべきか、それとも当日に母さんから伝えてもらうべきか。高坂さん楽しみにしてるって言つてたしな、祝つてもらうのが嬉しいんだろう。それを壊すのは……いや、後で言つても同じだよな。どうしよう

「いえ、良いです。今日は和菓子を買いに来ただけなので」

よし、ここはヘタレになり切ろう

「そつか。はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

会計を済ませて帰路につく。結局問題を先送りにしたわけだが……

「ああ、憂鬱だ」

もう一度溜息を吐いて、ゆっくりと俺は歩き出すのだった



カラソカラソ♪

「おつす、来たか總一」

「ああ」

8月3日、とうとうこの日が来てしまった。結局あれから高坂さんには伝えてない。今頃母さんから話を聞いて、落胆しているのだろうか。……いや、まあプレゼントは母さんに持たせたし、大丈夫だ

大丈夫…………だよな？

「はあ……」

「おう、どした。無表情で溜息とかなんか恐えぞ」

「刻むぞ」

「ゴメス。…………んで、どうしたよ？」

「別に」

特に言うことでもないので濁しておく。聞いたところで酒の肴にもならんだろう。酒を飲むわけじゃないがな

「ふーん、まあ良いや。そろそろお客様さん来るぞ、準備しとけよ」  
「わかってる」

.....さて、今日も頑張るか

# 閑話 僕が無表情が嫌いじゃなくなつた理由 2

「冷やおでん二つだ」

「わかつた」

孝太郎がオーダーを取り、それを俺が聞いて用意に取り掛かる

「…………孝太郎、今更なんだが」

「わり、忙しいから手短に」

「この店、喫茶店だよな？なんでおでんがあるんだ？」

「親父が好きだからに決まつてんだろう？わかりきつたこと聞くなよな」

「いや、でも…………まあいい」

どこか納得出来ないがオーダーを受けた以上、そして店のメニューにある以上出さないわけにはいかない。いかないんだが、冷やおでんって…………確かに大根に味が染み込んでうまいけどさ、なんでおでん？ 態々夏用に温かいのでなく少し冷えたおでんを作らなくとも…………どんだけ好物なんだよ店長

「今日はおでんの出が多いな」

何故か今日に限つておでんの注文がよく来る

この喫茶店に来てまでおでんを食べる人なんて決まつて常連さんかメニューを見て興味を持ったチャレンジャーくらいだ。この店の常連さんは店長の昔からの知り合いらしいが…………その常連さんが何故か今日に限つて多いのだ。店長がいない時を見計らつて来てるのか？…………いや、店長はそう嫌われるような人柄じゃないし、何より嫌いならば店には来ないだろう。それに店長と仲良さそうに話していたのも目撃している

…………もしかしたら俺は運が悪いのだろうか。今日に限つて常連さんラツシユとは

幸いおでんは店長が沢山作り置きしてくれている。後は盛り付けて出すだけだ  
「総一、おでんお代わりだつてさ。あと、二番にショートケーキな」

「了解」

お代わりとか気前良すぎんだろ店長!?どんどん無くなつてるんだぞ!?

せつせせつせと受けたオーダーを消費していく。開店から数時間、常連さんが多いからか知らないが結構人が入つてゐる。これは決定だ、俺は運が悪い。誰か、今日から俺を超高校級の不運と呼んでくれ

「はあ……」

今頃高坂さんの家では盛大にお誕生日パーティーでも行われてゐるんだろうか。べ、

別に行きたかったわけじやないぞ。友達の誕生日を祝うパーティーつてのを一度してみたかつただけなんだからな！

…………虚しい。しかもこれ行きたいつて言つてるようなものじやないか

どうせ俺がいなくても皆で楽しくやつてるよな。うん、ダイジョブダイジョブ。店長もそう言つてる

「どうした、また溜息なんて。てか、それやめろ」

何の気なしに冷蔵庫のドアを開閉してると注意されたのでそちらを見る。孝太郎が注文された品を置いておくカウンターにもたれ掛かりながらこちらを見ていた

「孝太郎、注文はどうした」

「全部届け終わつたよ。んで、珍しくも溜息吐いちやつてしまあ、どうしたんだよ。悩みがあるんなら聞くぜ。友人兼バイトの先輩の俺がな」

「ドヤ顔ウザいです先輩」

「敬語なのに何故か傷付く不思議！」

「そんなことはどうでもいい

「別に、溜息吐くことぐらい誰にだつてある」

「お前はそれ自体珍しいつて言つてんだよ。話せつて、今なら余裕あるから」と、言われてもだな。話したつて特に良いもんでもないだろうに、何故聞きたがるの

か

恐らく純粹に俺のことを心配してだろうが…………こいつとの付き合いも長い方じや  
ない、なんだ、こんな一面もあつたんだな。これは意外な発見だ  
「別に、本当に大したことはないんだが…………まあ、いいか」

「つまりお前、行きたいんじやん」

「…………」

ありのままそのままに話した俺は孝太郎の言葉に押し黙る

うん、まあね。過去形ではあるが行きたかったのは事実だけど、そんなキツパリ言わ  
なくともいいじやない？

「はく…………そう言うことはなんでもっと早くに言つてくれないんだよ」

「言えるわけないだろう。シフトも決まつた後だつたし」

母さんのせいで俺だつて困らされたんだ。休み明けとか謝らないと駄目なんだぞ。

園田さんとかから恐い反応返つてきそなんだぞ？だつてそなだよね。当日まで何の連絡もせずに急にボイコットだもんね。俺でも怒る、誰だつて怒る

「あー、実はだな縦一」

「どうした」

非常に申し訳なさそうに、それでいて真剣な顔を作る孝太郎に俺も自然と顔が強張つ……いや、どうせ変わつてないな。セロハンテープで無理矢理固定してやろうかな、この顔

「実は、今日は『チリンチリン♪』

何かを話そうとした瞬間にレジの呼び鈴がそれを遮る。暫しの間目を合わせた後、俺が顎でレジへ行けの合図を出すと苦い顔でレジへ向かつて行つた。ここからレジが見えるので、頬杖をついて眺める

「ありがとうございました、またのご来店お待ちしております。…………いらつしやいませ、何名様でしょうか？」

会計を済ませた後に笑顔でお客さんを見送り、接客する孝太郎の横顔を見ると、俺もあんな風に笑えればと毎回思う

銀色に光る冷蔵庫に微かに映る自分を見る。頬を掴み、少し伸ばしてみると変な顔が出来上がつた。次に口の端を人差し指で上へ押し上げてみる。ぶん殴りたくなつた

無駄だと思い手を離し、肩を竦める

「総一、四番にチョコレートケーキ二つ、あとブレンドコーヒーだ」

孝太郎の声を聞きすぐさま行動に移した。保存してあるチョコレートケーキを

……

「…………ない」

二つとも、ない

忙しくて既に無くなっていることに気が付かなかつた。思えばこの二つだけ、他のよりも数が少なかつたような気がする。さつき出したのが最後の一箇だということに気が付かなかつただなんて…………！」

「マジかよ…………どうすんだ、総一」

「ない物はしようがない。お客様には悪いが、別の物を注文してもらおう  
今から作ろうにも時間がかかりすぎる。諦めてもらう他方法はない

「いや、それは駄目だ」

なに…………？

「どういうことだ」

「出来るだけお客様のニーズには答えたいたいもんでな。ないなら代わりのもん作れ、なんとかしろ。…………今日は、お前が厨房を任されてるんだぞ」

「そうは言つても……」

どうしろと言うんだ

キヨロキヨロと周りを見回してみるが普段助けてくれる先輩方の姿はない。ここには俺一人、俺がどうにかしなければいけない。冷蔵庫を開けて材料を確かめる。チヨコレートはある。パンケーキにするか?いや、うちのメニューにあるしな。孝太郎も納得しないだろう

冷蔵庫の中には他に……色々あるなあおい

「…………ん?これは」

俺はとある物を発見する

ボウルに入つたそれは何かの生地だつた。既に水を入れた後なのか丸くくるめられてゐる

「もしかしてこれは…………よし」

決めた

「孝太郎、お客様にチヨコレートケーキがないことを伝えてきてくれ」

「だから、出来るだけ「そこにこう付け足して伝えるんだ」

「その代わり、当店にないメニューをご提供します…………つてな」

俺はそれだけ伝えてすぐに作業に取り掛かつた

…………ん？まだ孝太郎が動いてないな

「何して、早く行け」

「…………ふつ、りよーかい」

そう言つて何故か笑みを浮かべながら孝太郎は戻つて行つた

「合格だな。総一」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

お、終わつた…………やつとバイトが終わつた

入り口の札を close にした後、俺は孝太郎と二人だけになつた喫茶店の机で突つ伏す。今日も一日大変だつた

チヨコレートケーキが無く、なんとかしろと言う孝太郎には軽く絶望感を覚えたが、なんとか乗り切れたことだし良しとしよう

あの時、冷蔵庫にあつた生地はドーナツの生地だつた。と言つても、普通にパンケーキの用のものだつたのだが……アレを油で揚げることでドーナツを作つた。チヨコを溶かしてコーティングしたかつたが、冷やしている時間が無かつたので輪つかにすることはせず、少し薄い円状の形で二つ揚げた。その間に溶かしたチヨコと、フルーツを刻んだものを少量挟み、手が汚れないように紙で包めば完成だ。お客様に何も言われなかつたし、悪くはなかつたんじやないだらうか

「いやあ、お疲れ！頑張ったな」

「ホント疲れた。孝太郎もお疲れ様」

俺は机に突つ伏したままで孝太郎とお互ひを労い合う。ホントに疲れた。このまま家に帰つてベッドに横になりたい

…………ここに泊めさせてもらえないだらうか  
「そんじや、こつから後片付け…………」

うへえ、そう言えば後片付けがあるんだつた

「といきたいところだが、総一。お前は行かなきやならんとこがあるだろ？」

「は？」

今から行かなければならない場所？そんな場所…………あつ

「お前まさか」

突つ伏していた顔を孝太郎の方へ向ける。孝太郎を一瞬視界に捉えるが、それはすぐに消えた。目の前に何かがガサリと置かれたからだ。体を起こして見てみると、タツパーと紙包みが入つたビニール袋だつた。横では俺の荷物を持った孝太郎がドヤ顔で待機している

「そのまさかだ。ほれ、残りのおでんと…………お前が作つたドーナツの残り、持つてけ」「ドーナツはわかるが、何故おでん」

「全人類が好きだからに決まつてんだろ？ わかりきつたこと聞くなよな」

「いや、それはおかしい」

単純にお前と店長が好きなだけだろう

「いんだよ、早よ行け」

「でも、もう8時だぞ？ 今から行つても迷惑にしかならないだろう」

今から向かうとなると、9時近くになつてしまふ。和菓子屋なんてどうの前に閉まつているぞ

「それでも、祝いたかつたんだろ？ 高坂さんの誕生日」

「…………」

…………はあ、わかつた

「行つてくる」

「おう、行つてこいや」

ビニール袋を手に取ると、背中をドンと叩かれた。その勢いで走り出す

「…………ありがとな！」

店を出る前に孝太郎にそれだけを伝えて、僕は『穂むら』へ向かつて走り出した

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「はつ…………はつ…………」

『穂むら』の看板の前で立ち止まり、膝に手を付いて息を整える。店の電気はすっかり消えている。まあ、しようがないことだろう  
何故かここまで走つてしまつた。なんで僕走つたんだろう…………そりやあ、走ら

なきや駄目な雰囲気はあつたけど、無理して最後まで走らなくてよかつたかも知れない。高校からは部活をしていないから、体力は下がっていく一方だというのに……いや、まあ土日に走り込んではいるがな

「…………ふう」

よし、息は整つた

インターを鳴らしても良いが、なんとなく携帯を取り出して高坂さんをコールする。連絡先は音ノ木坂に受かつた時にお互い交換しあつた。あまり連絡はしないがな『はい、もしもし穂乃果です！』

すぐに携帯から快活な声が飛んでくる

「夜分遅くにすまない。宮野だ」

『ううん、全然良いよ。どうしたの？』

『取り敢えず、会つて話がしたい。下まで来れるか？』

『え？ 外にいるの？ わかつた、今すぐ行くね！』

俺が言うとドタドタと慌てたような音がしてすぐに通話が切れる。携帯をポケット

に戻し、暫し待つていると店の戸がガラガラと音を立てながら開いた

「こんばんは」

「こんばんは」

お互いにまずは挨拶を交わす

「バイト帰りかな。それって制服?」

「ん?…………あ」

そう言えば着替えずに荷物だけ引つ掴んでここまで来たんだつた

「これはお恥ずかしい」

「あはは、顔は全然そんな表情してないよ?」

それはしようがないんだ。触れないでくれ

……おっと、そうだ。こんなことをしている場合じゃない

「まず今日は、皆と一緒に誕生日を祝えなくてごめん」

「ううん、バイトだつたんだよね? それじゃあ仕方ないよ!」

高坂さんは笑つて許してくれた。やはり、俺がいなくても楽しくお祝い出来たようだ

安心した反面、少し寂しいような気もする

「そうか…………プレゼント、俺なりに選んでみたんだがどうだ?」

「うん、可愛いプレゼントありがとう! 早速付けてるんだ♪」

どう? と言ひながら自分のサイドポニーを見せてくる高坂さん。見てみると、サイド

ポニーは苺のゴムで結ばれている

俺から高坂さんへ誕生日プレゼントは、苺のゴムだった。女の子に誕生日プレゼント

なんて、千尋にくらいしかあげたことがないから何をあげれば良いのかが全くわからなか、悩んだ末にこうなった。何時ぞやに、苺が好きだと言っていたのを思い出したから、苺のゴムにしてみた

「気に入つてもらえたなら良かつた」

まああまり高い物ではないが、気持ちということで

「最後に、誕生日おめでとう」

「うん、ありがとう！」

「これは遅れたお詫びと言うか……まあいい。受け取ってくれ」

右手のビニール袋を高坂さんに手渡す。高坂さんは中を開き、紙袋の中とタッパーの中身を確認するとパア、と顔を更に輝かせた

「おいしそう！おでんにこれは…………揚げパンかな？」  
うーん、惜しい

「ドーナツだ」

「ドーナツ！やつたあ!!」

ドーナツと聞くや否やその場でクルクルと回り始めた。全く、本当に賑やかな娘だ  
…………そろそろ帰るかな

「それじゃあ高坂さん、俺はもう帰るよ」

「え、もう？ もう少しお話したかつたのに……」

「お話ならまた学校ででも出来るさ。それじゃ」

俺は踵を返して歩き出す

「あ、待つて！」

しかし、高坂さんによつて止められてしまつた。高坂さんの手が俺の手をしつかりと掴み、側から見れば手を繋いでいるように見えなくもない

「どうした？」

「えつと…………実はね？ 宮野君が今日来れないって聞いた時、ちよつと寂しかつたんだ」

…………え？

「高校生になつてから、いつつもじやないけど宮野君と私と海未ちゃんとこどりちゃんの四人でいることも少なくなかつたでしょ？だからかも。宮野君にも私の誕生日、皆で一緒に祝つて欲しかつたかなあ…………つて」

テヘヘ、と頭を搔く高坂さんの顔は街灯に照らされて、赤くした頬もはつきりと見えた

可愛い、と純粹に思つてしまふ。顔には出でていないうだろが、俺の心臓はさつきからいつもよりも早いビートを刻んでいた。これはずるい、こんなこと言われてこうならいい男なんていたら、そいつは本気のホモ野郎か、もしくはその娘に魅力が無さすぎるだ

けだろう

…………しかし、寂しかった？俺がいなかつたから？本当に？  
こんな、無表情な男なのに？

「俺といっても、楽しくないんじゃないか？俺は顔に出ないから」

そうだ、面白い話をしても基本俺は無表情。笑いを共有するって言うことが出来ない奴なんだ

「そんなことないよ！宮野君は海未ちゃんでも知らないことを知ってるし、なにより面白いお話してくれるよ？それに宮野君の無表情、私は羨ましいと思う時があるけどなあ」

はあ？羨ましい？

「俺がか？」

「だつて、ポーカーとかしたら超強いじやん！ババ抜きとかジヨーカー持つてるかどう  
か全然わからないし。私も結構うまく隠してるのでなあ……」

トランプのことばっかりだな。と言うかそもそも、トランプが強いのは単純に園田さ  
んがわかりやすすぎるだけだ。四人でやつた時大抵園田さんがドベじやないか

「宮野君は嫌いなの？」

…………高坂さんも高坂さんでストレートに質問してくるな

「嫌いだ。俺だって、高坂さんのように自然と笑つてみたいよ」

これが、俺の本心だった

俺だって、高坂さんや孝太郎のように自然な笑顔が作りたい。この顔のせいで、昔友達とちよつとした喧嘩だつてしまつたことがあるんだ。小さい頃は特に気に入らなかったけど、中学、高校となるに連れどんどん気になるようになつてきた。顔の表情筋がほぼ死んでいるのかと思つたから、それっぽいのを通販で漁つてみようとも思つた……友達の誕生日を祝うのに、笑顔で祝うことすら出来ないだから俺は嫌いなんだ。この顔が

「大丈夫だよ！」

下を俯いた俺の手を握り、高坂さんはそう言つた

「今きっと、宮野君は力を溜めてるんだよ」

「…………？」

力を、溜めてる…………なんのだ

「いつか、宮野君の顔が笑顔になる時まで、ずっと、ずうつと――きっと、宮野君の顔は力を溜めてるんじゃないかな？」

「なんの為にだ？」

「最高の笑顔を作る為だよ！」

そんなわけ……

「大丈夫、きつとそうだよ。ね？」

「…………」

俺の顔は、今力を溜めてる

きつと笑顔になる、その時まで力を溜めてるのか

本当に、そうなのか？もし、本当にそうなら

「ああ、もしそうなら、大丈夫だな」

そんなわけがないと、否定することが出来なかつた

高坂さんの笑顔を見て、大丈夫だと言う彼女を見て、そんな気が起ることはなかつ

た

「うん！…………あ、ごめんね！ずっと手を握っちゃつてた」

「いや、いい」

「うん！…………あ、ごめんね！ずっと手を握っちゃつてた」

高坂が慌てて飛び退く。握られていた手が外の、夏によくある蒸し暑い空気に晒され

て変な感じが残る

「ありがとう」

短くそう伝える

「どういたしまして。それじゃあ、また月曜日に会おうね！」

「ああ、また」

店に入つて行く彼女を見届けて、俺も家に向かつて歩き出した  
「…………力を溜めてる、か」

頬を触つてみる。相変わらず、そこには無表情があるのだろう  
だけど、もうただの無表情じゃない

「きっと、人類至上最高の笑顔だな」

もうそこに、無表情が嫌いな俺はいなかつた

# マネージャーになりました

家に帰るついでにゲーセンにある太鼓の超人でフルコンボを叩き出した後、クレーンゲームで運良くぬいぐるみが取れた

物凄く落ちそうな態勢であつた為に、これは取らなくては！と謎の使命感に襲われるがままに300円程投資してしまった。別に特に欲しい物でもなかつたんだが……やはりあの状態ならば取りたいと思つてしまふだろ？

「てか、なんなんだこれ…………」

ピ○チュウのお面付けてるぞ。これ大丈夫なのか？主に大人の事情的な問題で……おわつ！お面取れた！

…………まあいい、押入れにしまい込んでおこう

ピカチ○ウのお面の付いたぬいぐるみを持ってきたリュックサックの中に突っ込んで、ポケットから携帯を取り出す。これからグッズを買ったことを千尋に報告…………ああ、今の時間帯は部活かな。中学校最後の一年、是非ともこの一年を楽しんで欲しい学校に携帯を持つて行つているのかは知らないが、荷物として送つとけば良いだろう千尋喜んでくれるかな…………兄ちゃん大好きとか言つてくれたりして。兄ちゃんも

大好きだぞ、千尋。絶対に嫁にはやらん……！

ブー……ブー……

「！」

いきなり携帯が振動した。着信だな、一体どこの誰だ……？

気分が良い為か名前を見ることもせずに応答する。耳に当てて向こうの出方を待つ  
ていると、今では随分と聞き慣れた声が聞こえてきた

『もしもし、宮野君？』

「N.O. M y n a m e i s アーノルド○シユワルツネッガー」

勿論嘘だ。伏せ字つて声に出すの難しい…………この、ピー音じやなくてウウウン！み  
たいな感じにするのがね。ん？ウウウン！じやないか。言葉に表しづらいな

『ええ!?え、え!?こ、ことりちゃんどうしよ！外国人出ちやつた！名前と名前の間になん  
か変な声混じつてたけど！』

『ほ、穂乃果ちゃん落ち着いて！』

高坂さんだった。声が大きいからか南さんの声も聞こえる。相変わらず賑やかな娘  
達だな

因みに答えた名前は俺の好きな外国人俳優だ。一番好きな出演作品はラスト・アクション・ヒーローです。コマンドーも好きだな。てか、筋肉凄いよなあの人。一体どれだけ鍛えればあんな感じになるんだろう

『…………ハ、ハローー？ マイネームイズコトーリ』

「日本語でおk」

『穂乃果ちゃん！ 日本人だよ！？ それにやつぱり宮野君だよ！』

『嘘！？ もしもし、もしもーし！』

何をやつてるんだか……

「園田さんはいるか？」

『もう、宮野君の意地悪！』

何その言い方可愛い

『海未ちゃんなら今トイレに…………あ、戻ってきたよ』

「変わってくれるか？」

『いいけど…………なんか納得いかないなあ』

「気のせいさ」

高坂さんだと話が進まないかも知れないし、園田さんがわかりやすく説明してくれるはずだ。人には適材適所と言うのがあるんだよ高坂さん

『はい、変わりました』

「ああ。…………ところで、電話とは珍しいな？何か用が？」

『そこまで珍しいことではないと思うのですが…………まあいいでしよう。用という程のことでもありません。明日、私達と一緒に登校しませんか？少しお話したいこともありますので。集合場所は変わつていませんから』

一緒に登校…………随分と久しぶりな提案だな。入学して数週間はよく待ち合わせて行つたものだ。実を言うと家から普通に直行した方が早いのだが…………三人娘に誘われたらもう行くしかないだろう。行かなきや男じやない

話したいことは何かは知らんが、特に断ることもないだろう

「りよ」

『普通に了解と言えないのですか…………』

「それでも伝わったのだから良いだろ？」

『はあ…………あなたも大概ですね』

解せぬぞ園田さん。あなた”も”つて、一体誰と一緒にしたんだ

『では、集合時間は7時30分でお願いします』

『…………やはり25分にしましょう』

『…………やはり25分にしましょう』

何故早めたし

「では、特に遅れそうな高坂さんに10分前行動を心掛けるように言つておいてくれ。10分前行動だ、50分には来とくようにな」と

『では、明日遅れないでくださいね?』

ツッコミすらしてくれないとは……最近園田さんへ向けてボケると冷たい反応が返ってきて困る。高坂さんや南さんのような反応をしてくればもつと面白いのだが「じゃ」

短く挨拶を済ませて通話を切る。何やら向こうで溜息を吐いていたような気がするが気になら負けである。偶にはいいじゃないか、ふざけても。人生お堅いことばかりでは息が詰まるだろうに

「ドーナツ買つて帰ろう」

取り敢えず俺は目先にあるドーナツ店に足を運んだ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日、いつもよりも早い時間に家を出た俺は待ち合わせ場所まで来ていた。ここは三人娘の家からほほ等距離にあるちよつとした橋の上である。今日も青く晴れた空を見上げ、ゆつたりとした足取りで既に集合していた、高坂さんを除く二人の元へ歩いた

「おはよう」

「おはよう、宮野君」

「おはようございます」

ふむ……朝から女の子と待ち合わせ、意外に俺つてリア充? やべ、爆発しちゃうてか、高坂さんはどうした。10分前行動を心掛けるよう言つてもらつたはずだが? いやまあ、俺も正しく言えば出来ているわけでもないのだが

高坂さんを待たなければいかず、三人で暫し会話に花を咲かせる。ここに来る途中、猫が目の前を過ぎつたとか、それに対し黒猫か?と聞くとミケ猫だつたらしい。うん、非常にどうでもいい

「おはよー! 待つた?」

「穂乃果ちゃん！おはよ～」

程なくして高坂さんが元気に手を振りながら現れた。そして高坂さんの放ったセリフは正にデートの待ち合わせをしていたかのよう。こういう時にはこう答えねばならん。皆の者、よく聞いておけ

「2分32秒の遅れだ。よつてギルティなので学校まで全力マラソンの刑に処す。意義も反論も認めよう」

「ええ？そんな、朝から全力疾走なんて疲れるよ～！」

疲れさせたいんだよ。とは敢えて言わないし、そんな気もないしな。冗談だ、と言つて先に歩き始めると後ろから宮野君の意地悪！と言つた声が聞こえてきたが無視を決め込んだ。全くからかいがいがありすぎて困っちゃうな、高坂さんには

「早速だが、懃々俺の出勤時間を早めた理由を聞いておこうか」

暫らく歩いた後、園田さんへ質問を投げかける

昨日言つていた『少し話したいこと』が昨日二分くらい考えても思い浮かばなかつた。そりやそうだ、たつた一分だもの。でもこんな早い時間帯に集合はないと思うんだ。普段ならこの時間帯は家でパズドラとかしてます

「実はね、宮野君にお願いしたいことがあるの」

南さんが俺の質問に、少しだけ身を屈めて答えた。真横にいたからな、そんな上目遣

いで見ないでもらいたい照れる

「お願ひね。大抵のことは聞こう」

「ホントに!? やつたね海未ちゃん、ことりちゃん!」

「待ちなさい穂乃果、まずは話をしてからです」

うむ、大抵のことじやなかつたら断るからね

取り敢えず説明求む、という視線を投げかけると園田さんは説明の為に口を開いた

「実は昨日……」

「成る程、音ノ木坂をアピールする為にスクールアイドルをやるのか」

「うん！ 人気が出ればうちに受験したいって子も増えるよね！」

「まあ、人気が出ればな。しかし……ふむ」

まあ纏めるとだな

一、現在音ノ木坂学院は廃校の危機に瀕している。理由は入学者数が年々減少していることにあり、このまま行くと来年には入学希望者数が規定よりも下回ると予想されて

いるという。その場合、来年からは新入生を迎えることなく、ただ廃校を待つばかり

恐らくはこの理由の一端は共学化したことにもあるんじやないかと思う。やはり裏目に出たようだ。学院側も一種の賭けだつたんだろうな……。

二、三人娘は音ノ木坂学院を廃校にしたくない。そこで高坂さんが思い付いたのはスクールアイドル。自分達がスクールアイドルとなり、学院をアピールすることで来年度の入学希望者数を増やすことが目的である

突拍子のないように感じられるが、まあ三人とも見た目は悪くないよりも寧ろ良い方なので、諸々の問題さえクリアすれば可能性は大いにあると言えるだろう

三、昨日それに関係さて部活を作る為に生徒会へ申請に行つたところ、人数が足りないと言われたらしい。しかも何故か、生徒会長直々にスクールアイドルを却下されたそうだ。これは手厳しい

まあ取り敢えず、部活設立の為の人数には届かなくても確実に確保出来る部員を確保しておこうと俺に話を持掛けた

ついでに言うとスクールアイドルの活動の方も手助けしてもらいたいのだと言う。今日明日辺りから練習を始めていこうと考えているのでそのサポート云々、俺が元野球部員だと言うことを知っているからか、野球とアイドルどちらも共通するような練習方法などがあつたら思い出して、その指導をして欲しいとか

四、新入生歓迎会の放課後に講堂を借りるから、その申請に付き合え  
俺がいる必要はあるのか、それは。そして何をするつもりだ……え、ファーストラ  
イブ？一ヶ月しかないぞ？

色々と言いたいこともあるがまずは置いておこう。三人娘がやる気になつてているん  
だ。俺も手伝えることがあるなら手伝うと昨日言つたばかりだし、断るような真似なん  
てしない

「本気なんだな」

「勿論だよ！」

「うむ、気概もよし

「よし、なら手伝おう。俺の名でよければ幾らでも貸す」

「ありがとう！」

「マネージャーゲットだね！」

マネージャー…………？ ほう、マネージャー。俺がマネージャー

あれか、練習の後にタオル渡したりスポーツドリンク渡したりすればいいのか。何気  
なくカロリーメイトとか渡してみようかな。練習後にカロリーメイト食つたら口の中  
がパサパサでカオスになつたことがある。高坂さんあたりにしたら面白い反応が返つ  
てきそうだな

うむ、是非ともやろう。真剣の中にもやはりおふざけって大事だと思うんだ  
「よし、なら早速講堂の許可を取りに行こう！学校まで競走だ！！」

思い浮かぶ数々のネタを纏めていたら高坂さんがいきなり走り出した。え、なに？なん  
である人急に走り出してんの？

「待つてよ穂乃果ちやん！」

「急ぐと転びますよ！」

あ、二人も走り出した

何これ、俺も走らなきや駄目なの？夕日に向かってマラソンだ、つてか。時間的に無  
理だろ、どちらかというと朝日だよ。朝からダツシユとか怠いんですが  
…………まあいや、俺はゆっくり行こう

「遅いよ～宮野君」



「勝手に走り出したのはそつちだらうに」

不貞腐れたような顔で文句を言う高坂さんを尻目に、三人娘に連れ添つて生徒会室へと向かう。やはり俺がいる必要はあるのだろうか、甚だ疑問である

「穂乃果ちゃんとはまた違つたマイペースだよね」

「と言うよりも、捻くれ者の方が正しいかもせんね」

「失礼極まりないな。俺程真っ直ぐな人間はそういはないはずだ」

「気の所為でしよう」

非常にどうでもいい話をしながら生徒会室の前までやつてきた。園田さんが扉をノックすると中からどうぞ、と声が聞こえる。高坂さん筆頭に生徒会室へ三人娘が入つて行くのをここで見届けようかと思つてたら南さんが俺の背中へ回り、俺も生徒会室へ押し込まれた

生徒会室には二人の役員がいた。方や金髪の明らかにどちらかの親が外国人なのではないだろうかという髪色の美少女さん、しかし顔立ちは日本人に非常に近いのでクオーターナンジやないだろうか、と友達が言つていた気がする。確かにこっちが生徒会長

もう片方が副会長、こちらは普通に美少女だ。一部分を除けばの話だが。確か……うちのクラスにたつた五人しかいない男子のうちの一人、高山蓮が一年の頃告白し玉

砕した相手だつたな

あの時は一年にしか男子がいなかつたし、数も十人しかいなかつたからな……皆で励ます為にカラオケやボウリングに行つたことは良い思い出だ。思えばあれから俺達十人の絆は深 k（以下略）

「こんな朝から何の用？」

「講堂の使用許可を貰いに来ました！」

「生徒は部活動に関係なく、講堂の使用許可が貰えると生徒手帳にあつたので」

「明らかに敵意を向けて来ている生徒会長に臆さず答える高坂さん。堂々としてるなあ

「新入生歓迎会の日の放課後やね」

「…………何をするつもり？」

「ファーストライブをします！」

「おお、言い切つた。残り一ヶ月しかないのによく言い切つたな

「まだ出来ると決まつたわけじや…………」

「そうです。まだ決まつてないんですよ？」

「ええ、やるよお！ね、宮野君！」

本人は確実にやる気らしい。それは良いのだが、俺に振るな

「やればいいんじやないか?」

「なつ……」

しかし、俺も反対ではない。…………園田さん、その顔面白いな  
一ヶ月でライブをやると、これから活動していく上で解消しなければならない問題  
はまだあるが、その幾つかは後回しにできないこともない。歌もダンスも既存のものを  
使えばライブをやること自体は可能だからな。学校内だけでの発表ということで、著作  
権に引っかかるつたりもしないだろう。…………いや、元々気にしなくてもいいのか?そこ  
ら辺よくわからん

まあ取り敢えず、ライブやることだけはできるわけだ

「貴方は?」

「新しいメンバーです。歌いも踊りもしませんがね」

「君……毎週土日の朝に神社の前を走って通る子やね」

ん?確かに土日、走り込む時は神社の前は通るが、何故知ってるんだ?

…………まあいい、非常にどうでもいい

「昨日この三人にも言つたのだけど、貴方も二年生よね。残りの二年、どうするかをきち

んど考えた方が賢明だと思うけど?」

「そうですか、頭の片隅に置いておきます」

ああ、頭がお堅いタイプか。こういうのには適当に相槌打つときやいいだろ  
「そう……それよりも、出来るの？新入生歓迎会はお遊びじゃないのよ」

「出来ます！」

「穂乃果…………！」

「…………不安ね」

目の前の三人のやり取り見て俺は頭を搔く

やるつて言つてるんだから別に良いだろうに、生徒会に生徒の行動を制限するような  
権限はなかつたと思うんだが。昨日スクールアイドルの活動を否定されたという話を  
聞いたが、もしや私的事情じやないだろうな？だとしたら非常に面倒だ。生徒会はいわ  
ば学院側、スクールアイドルなのに内側からの支援が貰えないとは如何なものか  
「まあええんやない？講堂の許可を貰いに來てるだけなんやし」

「希…………」

「…………おお、副会長。話がわかるじやないですか。どれ、俺も押してみるか  
「で、許可は貰えるんですか？貰えるのであれば早くしてもらわないと、始業のチャイム  
が鳴つてしまふんですけど」

「…………わかりました、許可します」

よつしや俺達の勝ち！なんなら生徒会長の向かつてドヤ顔の一つでもしてやりたい

とこだが、残念ながらあいも変わらずの無表情なんだろうな。だからせめて心の中でドヤ顔をしてやろう。ドヤア

そして俺達は生徒会室を出る。最後出る時に生徒会の二人を一瞥したのだが、片方からは微笑みを、片方からは一睨みをもらつた。どつちがどつちだつたかは言うまでもあらず

「何故ライブをことを言つたのですか、取り敢えず秘密にしておいて、申請だけしようと言つたではありませんか！あと一ヶ月しかないのですよ！？」

「ええ、良いじやん別に。なんとかなるよ！」

「宮野君も宮野君です！何故あそこで肯定したんですか！？」

「何か問題でも？」

「大・有り・です！」

「そう怒ることないだろう。血圧上がるし皺が増えるぞ？」

「別にやること自体はできるはずだ。君ら三人がきちんと練習すればの話だが……一ヶ月でも大分違うものだぞ？」

「でも、失敗しちゃつたら……」

南さんもか。何がそんなに心配なのか…………これはあれか、少しキツイことを言つても良いのだろうか

遅かれ早かれ乗り越えなければならぬ問題もあるのだし、少しくらいはいいよな？

「失敗するかもしれないからやらない、って理由でやらないのなら何も出来ないぞ？

……ま、本当にスクールアイドルやりたいって言うんなら少し無茶通してでも今回のライブはやっておくべきだ。あまり酷いものは見せられないが、形にすれば何の問題もないだろう」

新入生歓迎会でライブをやれば何人か見にくる可能性が上がる。新入生歓迎会、つて言う所謂ブランドみたいなもの、と言えばわかりやすいのかな。何かのイベントですることによつて、ついでだから見てみようとか、そういうことを思う人がいるものだ

逆に言えば、普通の平日にライブします、なんて言つても何の知名度のないアイドルのライブを、懶々見にくる人があるだろうか？どちらにしろやるとしたら放課後だが、放課後と言えば部活で汗を流したり、部活をしていなければファーストフード店にでも行つて駄弁つてた方が有意義に思うだろう

だからどうしても、ファーストライブは新入生歓迎会の日が良いと俺は思う

「なに、要はしっかりと練習し、失敗しなければいい話だ。ファーストライブだろうがセカンドライブだろうが、失敗したら終わりなのはどんな時でも同じだろ」

だからつまり……大丈夫だと言うことだ

「うんうん……」

「…………それは、そうですが」

「…………」

役一名しきりに頷いていて本当に理解しているのかどうか怪しいが、納得してもらえたようだ

「そろそろチャイムが鳴るな、早く教室に戻ろう」

なんか気不味くなりそうだったので一足先に教室へ向かう

さあて、男子共からスクールアイドルの情報でも集めるところから始めてみようかな

# 綺麗な音色に誘われた

「今日もいい天気だな」

「春だな」

孝太郎の言葉に相槌を打ちながら、ドアを開く

現在は昼休み。俺達が来たのは音ノ木坂学院の屋上、ここに俺達音ノ木坂学院の男子が全員集まっていた

全員、つまり一年生もある。今まで何かある度にこうやつて集まることはあつたが、一年も呼ぶとは一体何が始まるというのか？俺達を呼び出し貴重な昼休みの時間を奪い去つていく主犯格である奴ら、青木 弥生と赤川 康太が真ん中で踏ん反り返つているのがマジで気に入らねえ。これは購買でジュース一本だな

「あ、俺昨日見たぜ！のんのんびより！三話まで」

「おま、ちゃんと全話見て来いって！」

「だから、これはここに代入だつて」

「おい、成る程」

一年をほつといて二年勢は日々に話をしている。すげえなあいつら、自分達で呼んど

いてほつたらかしにしてるよ。一年オドオドしてんじやん。勉強している奴らもいるが……取り敢えず挨拶をするか

「にやんぱすー！」

「にやんぱすー！」

「にやんぱすー！」

「にやん、ぱす！」

「おいなんか沸いたぞ」

流石だな。お前ら好きだ、友達として

て言うか最後の奴、何そのふえい、たす！みたいな言い方。面白いなそれ、マジファ

二一

「で、弥生。俺達を呼び出した理由はなんだ」

「お、全員集まつたのな。今回の集まりはだな、この学校の少ない男子で仲良くしま  
しょ一つつうもんだ。一応一年には参加の有無を連絡したぜ？俺の弟からな」

へえ、話には聞いてたが弟もここを受験したのか。……お、あいつか

「んじやあ早速親睦会始めまつしょい！」

「うるさい、耳元で騒ぐな」

横の方でも騒ぎ始めたか

しかし、一年の奴ら全員来たんだな。別に断つてくれても良かつたんだが……だが丁度いい、スクールアイドルについての情報を引き出せるだけ引き出すか。まずはどういった感じが受けが良いのかなど、他にも……取り敢えずなんでも良い、情報を集めないと

二年の奴らからはいつでも聞き出せる。まずは一年からだな

一年の集まる場所に歩きゆつくりと腰を下ろす。そうなるとやはり視線が集まるわけだが、役一名ガン見してやがる…………まあいい

「少し聞きたいことがあるんだが」

「は……はい」

そんなに緊張するな

「スクールアイドルについて俺に教えて欲しい」

『…………は？』

見事にその場の全員の反応が一致した瞬間だつた



「総一、バイト行こうぜ」

「ああ」

放課後、荷物を纏めて肩に担いで孝太郎の後を追う。三人娘に今日、高坂さん宅に集合だと言わされたが、バイトなので断つておいた。あちらはあちら、俺は俺でそれぞれスクールアイドルの活動について考えておくのが明日までの課題だ。今日決まったことがあれば連絡すると言われた

結局、昼の集まりで有力な情報はそこまで得られなかつた。俺の発言の後、スクールアイドルの話でその場は持ち切りになつたわけだが、あのグループが良いだの、この子が可愛いだの、そう言つた話ばかりが飛び交つてしまい、更には色んなところからこのグループのファンにならないかとか、一年含め殆どの奴に詰め寄られた

野郎に詰め寄られても嬉しくないつての

まあ、結果的に親睦会としての役目は果たせたし良いんじやなかろうか。終いには弥

生の奴が

「是非とも皆、総合スポーツ部に入ってくれたまへ〜！」

なんて言い出したもんだから、結局それが目的かよ！と全員でツッコまざるを得なかつた

総合スポーツ部とは名ばかりの、土日休みで放課後、スポーツして遊んでいるような部活だからな……いや、スポーツしてるんだからいいのか。はつきり言つて部費なんて全然出てない。そのくせ俺と孝太郎以外は入つてるんだからわけがわからない

全然情報集まんなかったし、結果的に俺のおかげで一年と親睦は幾らか深まつたのにそれをダシに使われたし、頭が痛いぞ全く

「おい、総一」

「…………なんだ」

こうなつたら我らが皆の大先生、Google先生に頼るしかないのか、と考えていたところに孝太郎から声がかかる。孝太郎が顎で前を指すので見てみると、そこには一年の男子がいた。短く切り揃えた黒髪にしつかりとした体躯、明らかにスポーツしてますつて体をしていると言うか、なんとい言うか

どこかで見覚えがあるような……？いや、確かに昼休みにあの集まりにいたんだが、それ以外で

俺が見ると一礼する

「宮野先輩、今いいつスか」

案外張りのある声だ

俺は孝太郎と目を合わせると、孝太郎は俺の肩を叩いて後輩君の前へ押し出す。やめろ押すな馬鹿

「遅れても良いぜ、その旨は伝えておく」  
「……わかった」

はつきり言うと面倒なんだが、折角ここまで訪問して来た後輩を無下にするのも憚られる

「えつと…………ちよつと……じゃ人が多いし煩いんで、中庭にでも行きませんか」

「…………」

少しモジモジしながら言う目の前の後輩君を見て急に行きたくなくなつてきたんですけど。え、待つて。何その反応？やめてそれ、なんか深読みしちゃうから。男のそんな姿見せられても嬉しくねえよ。いいじやん別に人いても

孝太郎は…………もういない

「りょーかい」

取り敢えずまあ、着いて行こうか

「で、態々呼び出した理由を聞こうか」

靴に履き替えて中庭まで来たわけだが……なんか今日は呼び出されるのが多い気がする。この勢いだとそのうち理事長とかにも呼ばれたりするんじやなかろうか？それはそれで俺何したんだよって話だな

「えーと、確か名前は……藤木 晴矢だつけ」

「はい！覚えててくれてたんスね」

まあ、記憶力は悪い方じやないからな

「いやあ、覚えててもらってるか不安だったんスよ。ほら、もう一昨年の夏以来でしたから」

「一昨年の……夏？」

顎に手を当てて考えてみる

一昨年の夏？と言えば……野球部を引退したら爺ちゃん婆ちゃんの家でスイカバーとドーナツ食つて、偶にトレーニングをしてたぐらいの記憶しかないんだが。あと

## 受験勉強

いや、待てよ。野球部？

「ああ、もしかして」

最後の試合で当たつた学校のピッチャーを二年がやつてるところがあつたな。確かにその名前が……

「思い出した。あの天才ピッチャーか」

「いやあ、天才だなんて……」

懐かしい、と言つても一昨年の話だが

俺の野球部最後の試合は、悔しくも一回戦敗退。一番最初に優勝候補である学校と当たつたしまつたのが運の尽き、いい勝負だつたが最後二点差で負けてしまつた

俺達も一応、大穴でうまく行けば優勝を狙える程ではあつたんだけどなあ……県大會行きたかつたな

まあ、過ぎたことを嘆いても仕方がない。それよりも疑問に思うことがある

「その天才ピッチャーがなんでもまたこの学院にいるんだ？ 色んなところから呼ばれたんじゃないのか？」

確か一昨年も去年も活躍したと耳にした。そんな将来有望な野球選手がまたなんでも「ええ、まあ……俺も色々と考えたんスけどね。やっぱり母さんの母校でしたし、別に

もう野球が出来ればどこでも良いかなって。プロになる気もありませんし、夢があるんで

で」

「ふうん……それだけでここに来る理由になるとは思えないが。まあ色々と考えてのことなんだろう。俺が気にするようなことでもない

だが、野球が出来れば、か

「ここに野球部はないはずだが」

「作るんスよ。総合スポーツ部の先輩方にも協力してもらおうと思つてるんス」  
うーん、協力してくれるかどうかはまた別として

「俺も野球部に入れと」

「はい！宮野先輩がいたら百人力じやないっスか！だつて先輩だけですよ？」

興奮するように詰め寄つてくる黒石の頭を押さえつけて押し返す。やめろこつち来  
んな鼻息荒くすんな

「俺だけつて何がだ」

「俺からホームラン打つた人がつスよ！」

…………あー

「何を勘違いしているのか知らんが、あれはファールだつたはずだが」

六回の裏ツーアウト一三塁、際どいところへ正確に投げてくるピッチャーダつた。

フォークやカーブをなんとか粘り、ツーストライクワンボールの時、外角やや低めにストレートが来たので思い切りスイングしてやつた。勝負を焦り過ぎたか、タイミングが少し早く、芯で捉えたのだがそのままレフト側のスタンドへ落ちて行つた。それもファールで

その後、デカイのを一発打たれたからか少し球に落ち着きがなかつた。結局俺はフォアボールで出墨。その後そのまま崩れていつてくれればよかつたんだがな、先輩や顧問の先生から声を掛けられなんとか立て直していたようだ  
「あと数センチ横に擦れてたらホームランでした。あれが入つてたら俺達は負けてたんスよ」

「一昨年の話を持ち出して I.F の話をするな。数センチ擦れようが擦れまいがファールはファールだろ」

そうやつて割り切つたんだ。あれが入つてれば、なんて後で幾ら思つたことか出来ることならもう一度戻つて挑みたいが、それを考えるだけでも虚しくなつてくるのですぐに考えるのをやめる

「でも、決定打を打てる程の力と技術があるつてことつスよね」

「…………はあ」

これは面倒だ。こいつ、言外に断つてるのが伝わつてねえ

「取り敢えずお断りだ。部活の誘いは他に来てるし、これからは全部を両立出来るほど暇になりそうもない。藤木には悪いが、タイミングが悪かつたな」  
流石にマネージャーと学生、バイトだけで手一杯だ。それに野球が加わるとなると、非常にキツくなる

タイミングがタイミングなら引き受けたかも知れないがな。もうこればっかりはどうしようもない。決まつてしまつたことだ

「そうつか……」

「なんだ」

目に見えて落ち込む姿を見ると悪いことをしたような気がする。まあ、やるとなると応援はするさ

「でも俺諦めませんよ！」

いや、諦めてくれ

「また誘いに来ますから！それじゃ！」

「…………」

そう言つて走り去る藤木を呆然と見送る

また面倒な後輩を持つてしまつたものだ。マジでなんなんだあいつ、俺断つたじやん  
「はあ……」

うわあ、これから度々勧誘とか来んのかな？面倒だなあ

それに、総合スポーツ部の奴らも協力するとは思えないんだよな。あいつは野球が出来ればいい、なんて言つてるが…………ありやあ多分、この学院で甲子園目指そうとか思つてる感じだ。あいつらは部活とは言えど、楽しくやつてる奴らだからそんな本気になるんだろうか？なつたらなつたでそれは構わないんだが…………ああ、いや待てよ。確かに一人だけ俺以外にも元野球部がいたな。無駄だろうが

…………まあ、部員が五人いれば部活は作れるらしいし、いいか。なんなら今年は部活を作るだけに止めておいて、来年新入生を集めて頑張る、っていう事も出来るしな

その場合、廃校を阻止しなければならないのが条件となつてくるが

「…………あつ、バイト」

そうだ、バイト行かない。生憎そんなに時間は経つてないから、遅れることもないだろう。そう言えば、今週の土曜日に予定が入つたから、シフトをズラしてもらうように言わなければいけない。その分他のところで働くから大丈夫だ、きつと許してくれる。店長結構軽いし

『ニヤー』

「…………！」

校門へ向かつて足を向けた瞬間に猫の鳴き声がっ！

急ぎ振り返つて見ると、なんと右斜め前方に真っ黒黒猫がいるじゃないか。俺の方へ向き、座つてそのザラザラしているであろう舌で前足を舐めていた。癪されるなあおい『ナウ』

俺が見ているのに気付いたのかこちらと目を合わせる。目と目が合う瞬間、好きだと気付いたわけじやないが、暫し俺達は見つめ合つていた

そしてふと、真っ黒黒猫は立ち上がり俺の目の前を横切……る前に黒猫へ向かつて、マリオもビックリなBダッシュを開始した

…………横切らせん!! 横切らせはせんぞ!!縁起が悪いって言うからな!!

『フニヤツ!?』

黒猫はいきなり走り出した俺にビックリして飛び上がり、反対方向へ走つて行つた。なんとなく俺もそれを追い掛ける。こうして俺と黒猫の鬼ごっこが始まつたわけだ

待ちたまえ真っ黒黒猫……おい、待てつて。H e y c a t !!

追い掛けても捕まらず、そのまま真っ黒黒猫は俺の目を搔い潜りどこかへ隠れてしまつた。奴め、どこへ隠れおつた。見つけてうちの喫茶店の看板猫にしてやる。あいつ野良みたいだしな。売り上げ上がるよやつたね店長

「…………ターゲット、ロスト」

完全に見失つた。逃げるのが上手いな、野生の動物つてのは

しかし、黒猫と鬼ごっこしてたら校門の反対側へ来てしまつた。近くにある校舎の中を覗いてみると、人の通りがチラホラと見えるくらい。どうやら空き教室などが多い方へ來たみたいだ。確かにこつちにあつたのは化学室やら生物教室、その他美術室やら音楽室だつたか。移動教室でしか來ないからうろ覚えなんだよな



「ん？」

よくよく耳を澄ませると上から音楽が聴こえてくる。一瞬着信音かと思つたが、俺は基本バイブ機能にしてるので音が鳴ることがない。それに、この音は多分ピアノじやなかろうか

確かこの上は音楽室があつたな……それにしても、聴いたことのない曲だ。感じ的に最近の曲のような感覚がするが、生憎俺は最近の曲なんて殆ど聴かない。アニソンやボカロなら聴くんだがな……聴かないわけじゃないが、知らない曲の方が絶対に多いどこかのアイドルの曲とかか？

「しかし、綺麗な音だな」

素人の俺が聞いても綺麗だと感じるこの音、一体どの誰が引いているのか。気付け

ば窓を開けて中へ入ろうと……あれ、鍵掛かってる

ちょうど近くを通り掛かる女子生徒がいたので、コンコンと窓を叩く。すると女子生徒はこちらに気付いた。ちよいちよい、と手を招くと私?と言った風に指を自分に指すとこちらに歩いてきた

鍵を開けてくれとジエスチャーをすると何故か俺と同じジエスチャーを始める。いや、違えよ。鍵開けてって言つてんだよ

窓を開ける動作をすると俺の意図に気付いたのか、照れ笑いしながら開けてくれた「ありがとう」

窓から廊下内へと身を乗り出しながら礼を言つて、靴を器用に脱いでから中へ乗り込む。靴を片手に階段へ向かい駆け上つた

音楽室のある階へ到達すると音が更に大きくなる。はてさて、この音の発生源はどちらなのか…………気になる、非常に気になる。時間的に見ればどこかの部活の人間か、恐らく学年は…………いや、待てよ?今まで一度もこんな音色を聞いたことがない。だとしたら一年なのか?聴いたことがないだけなのかも知れないが

音楽室の目の前に来ると不思議なことに、扉一枚を隔てていてもしつかりと耳に届く綺麗な旋律

中を覗いてみれば一台のピアノと、それを自由に弾き鳴らす赤毛の女子生徒。間違い

ない、音の発生源はある子だ

「…………綺麗だな」

彼女の奏でる音色も、彼女がピアノを弾く姿も。ろくに美術的感覚が優れているわけでもない俺がこう思うのだ。きっと多くの人が同じことを思うだろう

少しだけ見つめ、扉から離れ壁に背を付けて聴き入る。なんと言うか、言葉に表すのはあまり得意ではないんだが…………そうだな、波長が合うような曲というか、個人的に心にグツと来る曲というかだな

例えばニコ動とかで初めて聴いた時、思わず何度もリピートしてしまうようならうん、これが一番わかりやすい

一瞬見えたが、彼女のリボンの色は一年生のものだつた。もしかしたら、これからもここに通い続けるのだろうか？そして、この綺麗な音を奏でるのだろうか  
だとしたらまたここへ来よう。俺にとつてそれ程の価値がある

「…………あ、バイト」

まだ演奏が終わっていないのにバイトのことを思い出してしまつた。非常に惜しいのだけど、そろそろ行かなければならぬ

もう一度中を覗き、彼女を一瞥して歩き出す。一瞬目が合つた気がしたが気にせずにバイトへ向かつた。ああ、俺のせいで演奏が止まつてしまつたようだ。すまないな、名

も知らぬ後輩ちやん

また聴きに来る

「さて、今日もバイトを頑張ろう」

そして帰つて情報集めだ

# 練習開始

あの後急いで喫茶店『バース』へ向かった俺は無事バイトを終え、土曜に休むと言うことも忘れることなく報告した。素晴らしくスマーズに行つた一日でした。今日は思わぬことに、綺麗な音楽との出会いもあつたわけで少しテンションが高い……まあ、バイト中におでんを受け取りに来た女の子には少し怖がつているような

反応を向けられ若干沈んでるが。いや、しかしあれは最初だけだつた。初対面の無表情男が出てきたらビビる…………のか？要するにドラママイゼロだ

うちの喫茶店はおでんのお持ち帰りだけを行つてているという、何ともよくわからないことをして。他の喫茶店は持ち帰りとか出来るんだろうか…………だとしたらおでんしか持ち帰り出来ないうちの喫茶店つて…………？

まあいい

確か女の子の名前は…………そう言えば聞いてないな。俺がおでんを手渡そうとしたら、につこにつこにーーと空元氣か何かでやつていた。小学生の間では流行つてゐるのだろうか？どこかのアイドルの真似かな？

「失礼します」

「おーう、お疲れちゃんソウ君。またねー」

「はい、また。孝太郎もまた明日な」

「おう、じやなー」

先輩と孝太郎に挨拶して店を出る。正直言つてソウ君はやめてもらいたいんだが……去年から言つてることなのでもう諦めた。店長も俺のことをソウちゃんと呼ぶし……最近では他の先輩や店長の奥さん、さくらさんまでもが呼び出した。ここまで来たらもう諦めるしかないだろう

さて、今日は帰つたら課題してアニメ……いや、いかんいかん。スクールアイドルの情報集めだ

まず情報集めと言つても何から始めようか。起源から？いや、必要になるとは思えないな。まあ取り敢えず動画を漁つてみようか

「…………ん」

ポケットから携帯を取り出して時間を見ると、通知が入つていてるのが見えた。とあるSNSツールで、三人娘と俺で四人のグループを作つてるので、そこに誰かが書き込んだんだろう。あのグループだけは通知をONにしていたからな

開いてみれば他にも、OFFにしているグループにも通知が溜まつている。音ノ木坂の男子共が明日の部活内容のことで騒いでやがる。明日は野球をやるかサッカーをや

るか、はたまたラクロスをやるか話し込んでいるな。ラクロスなんて、道具をどつから持つて来るんだ……もしやるんなら混ぜてもらおうかな、バイト休みだし

「おつと、そんなことよりも」

三人娘はなんと……なになに

「明日から朝早くに練習、場所は神田明神」

いつも走る時に前を通る神社だな。俗に言う朝練か、俺も中学の頃は早起きして行つたものだ。そうと決まれば帰りにスポーツドリンクでも買って帰ろう、明日必要になるだろう

「朝練でダンスの練習……体力作りも必要か?」

まず曲は何を使うかなんだけど、それらは決めたのだろうか。使うとしたらの話だがいや使わざるを得ないと言うか、そもそもオリジナルの曲なんて誰が作る?

中学の頃の友達なら現在バンドをしている奴がいるが、作曲をしているのはあいつじゃないらしいし、頼んでみるのもいいが果たしてOKしてくれるのだろうか。考えてみようと思うが、そもそも一ヶ月後に間に合うとも思えないな

他には、えーと……あ、グループ名決めてないじやん。アイドルって言つたらグループ名があるもんだよな

「まあこれも後回しでいいか」

そんな簡単に決めていいもんでもないだろう

今日の三人娘の会談で何か進展はあったのか……何も書いてないが、明日聞けばいいかな

「あ、カロリーメイト必須」

やつぱり、ちょっとくらいお巫山戯ないと駄目つすよね！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おはようございます宮野君、早いですね」

「ああ、おはよう」

スポーツドリンクとカロリーメイトの入ったリュックサックを背中に下げ、神田明神の階段の下まで来ると園田さんと鉢合わせた。昨日決まつたことを教えてもらいながら階段を上がる

成る程、曲は作ってくれるあてがあり、その人に頼んでみると……そして作詞は園田さん、衣装は南さん……成る程成る程、名前は決まっていなくともそこまで決まつ

て……

「ちょっと待て」

階段を上りきり神社の前で立ち止まつたところで、俺は園田さんの話を中断した  
「はい？」

「作曲してもらうつて……そんな時間ないんじやないか？一日二日じやできるもんじや  
あないだろ」

しかも一体どこの誰が作つてくれるつて言うんだ。曲を一つ作るのにどれ程の時間が  
いるかは知らんが……一ヶ月、一ヶ月だぞ？ちょっと無理があるんじやないのか？  
「穂乃果は大丈夫だと言つていますが……」

「それを信じたのか……その根拠は？」

「一年生にとても上手にピアノを弾く人がいると聞いてます。穂乃果が音楽室でその人  
の演奏を聴いたそうで」

ほうほう、うちの一年にそんなのがな

しかし、音楽室か。もしやあの赤毛の後輩ちやんか？あの子に作曲を頼むとしても  
まずその子がしてくれる保証はないし、何度も言うが時間がないはずだ  
俺は顎に手を添えて考える

いや、待てよ。その子の腕は未知数だからまだ置いとくとして、クオリティ

をある程度捨てて作曲してもらえば一週間であがるか？取り敢えず一週間であがると仮定しよう

そこから振り付け考へて練習を大体二週間続けて、作曲の間の一週間は体力作りに集中して……後はダンスの練習しながらでも体力作りはできるし、あとは歌の暗記で踊りながら歌えるようにすることか

「どうしました？」

「これ、案外いけるか……？」

最後が少し厳しいかもしだれなが

「よし、わかつた。園田さん、作曲はその一年生に頼んでみよう。この際クオリティは二の次だ、そこは衣装と歌詞でカバー出来るかもしだれながから頑張つてくれ」

俺がそう言うと園田さんの顔が強張つた。うん、俺もはつきり言つて園田さんが作詞なのには驚いた。園田さんは見た目清楚な感じで、それはあながち間違いじやないんだが……本を読んでいるというより稽古してるイメージしかない。これも家のことを知つてるからだろうがな

「なんだ、中学とかでは詩のコンクールに入賞でもしてたのか？」

「そ、その…………」

非常に言いにくそうにしている園田さんに少し首を傾げる。あまりこういつたこと

を自慢するタイプでもないからか、気恥ずかしいのだろう。顔を赤らめて口をモゴモゴしている様子は見ていて楽しい

「まあ別に言いたくないのなら無理に聞かないけど……コンクールに入賞したとか、それこそ凄いことだと思うけどなあ」

「ああいえ、入賞したとかではなくてですね」

「……？」

ますますわからん

まあ何か理由があつてそういう分担になつたのだろう。深く追求することでもないし、どうやら南さんが来たようだ。階段の下辺りから駆け上る音が聞こえ、彼女のトサカの様な髪が見えると同時に彼女の顔も見えてくる

「おはよー」

南さんからの挨拶に俺達も挨拶を返し、高坂さんを待つことにした

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あれから高坂さんが数分遅れでやつて来て練習を開始することに。まずは体力作りの為に走るそうだ。しかし、準備運動をせずに走るのは良くないので、体育でやるようなのを軽くする

ついでに柔軟運動もやつたのだが、高坂さんが背中を押してくれと言われた時にはビビった。いや、確かに俺を入れれば偶数だけどね？なんか違うじやん、ほら性別とか、主に性別とか！戸惑うも無表情なのでうまく伝わらず、仕方なしにその事を伝えると高坂さんと南さんは何ら気にしないようだ。園田さんは言わずもがな、高坂さんが背中を押してくれと発言した時からワーイヤー…………ではないが、何か言つていたがな

て言うか、俺が男つてこともしかして忘れたりしてないよね？うん、今その事伝えたもんね？それでも大丈夫つてそれって俺の事異性として見てないってことじやね？異性として好きなわけではないが、俺としても思うところがあるぞ…………

だが大丈夫と言うのなら…………うん、まあいんじやない？うん、やるけどもね？ほら、こう言う機会はなかなか無いわけだし、下心があるわけじやないぞ、ホントだぞ。いや、マジで（割と本気）

てなわけで柔軟も終えて現在、走っている三人を見ているわけだが

「ひい…………」

「はあ…………はあ…………」

高坂、南ペアはどうやらダウン気味である。非常にキツそうな顔でさつき園田さんが提示したノルマへと向けて階段を疾走している

「スピード落ちてますよ！ラスト一本です、頑張つてください！」

園田さんは二人より遙かに早いスピードで階段を駆け上っていた。最初と比べ大分スピードの落ちている二人へ向かつて叱咤激励する姿からは疲れなんて全然見えないしかし無理もない。あの二人は運動部に所属しているわけでもなし、つい昨日まで運動なんぞ体育ぐらいしかやらなかつただろう

それに比べ園田さんは日舞の家元、園田道場と言えば有名なんだそうだ。しかも日舞だけではなく剣道、薙刀、古武術……学校では弓道部、はつきり言つて俺よりも体力があり、ガチで喧嘩なんぞしようものなら五分と持たず負ける自信があるぞ

ラスト一本の階段ダッシュへ入つた二人を見届け、俺は神社の賽銭箱前に置いてあるリュックサックを取りに行く。その時、ふと横を見てみれば視界に巫女服の女性が映つた。手には竹箒を持つて、こちらを見ている

どこかで見たことあるような……

「頑張つてるようやね」

記憶を手繰つていると、その巫女さんから声が掛けられた。いつの間にか近くに歩み寄つてきている。近くでよくよく見てみると、なんどうちの学校の副生徒会長様じやな

いか。あの時はお世話になりました

ああ、そう言えばこの人、何故か俺が毎週の土日にこここの前を走ることを知つてたな。  
成る程、巫女さんならば見かけることもあるか

「ええ、と言つてもまだ初日ですが」

「でも、本気が伝わつてくるやん？」

まあ、確かにそうではあるが

副会長と一緒に三人の方へ顔を向ける。丁度高坂さんと南さんがラスト一本目を終  
えたらしい。地面へへたり込む一人を見て、副会長は三人の元へ歩き出した

幾らか会話を交わしているのを賽銭箱の前で眺める。会話が終わつたというか、副会  
長に何か言われたようで、三人娘はこちらにやつて来た。どうやらお参りをするんだそ  
うだ。成る程、副会長から言われたんだな。商売上手ですね

やらぬいかと言われたが、やんわりと断つておいた。そのせいで高坂さんが少し駄々  
を捏ねるが、まあいいだろう。気にせずに入り、ソーツドリンクだけ渡して、お札を聞きな  
がらお参りをする三人から離れる

「君はせんの？」

「…………ええ、まあ」

お参りすることにイマイチ意味を感じないからな

そりやあ、初詣やら何やらの時はお参り行くよ? だけど、何かを叶えたいとか、何かの成功を願うとか、そういう時は基本的にしない。と言つても、中学一年の後半辺りまではやつてたが。ほら、野球の試合前とか

でも、結局やるのは自分だからな。神頼みしても試合に勝てない時は勝てないし、勝てる時は勝てた。別に神様に祈ることが悪いとか言つてゐわけじやないし、勿論良いとは思うが……まあ、ライブをやるのは俺じやないし。俺はただのお手伝いだし「…………よし、ではもう一セット行きますよ!」

「うん!」

お参りを終えた三人また階段ダッショウへと走り出した

いやあ、元気あるなあ……

「君は、あの三人のマネージャーなんよね?」

「はい、そうですが」

なんだ? てか副会長、掃除中じやないのか。いいのか俺と話してて。暇なんですか? とは流石に言えないし……先輩だと好きなように弄れないし、いや弄ろうと思えば出来るんだが、この人の雰囲気が何故かそうさせてくれない。このタイプは駄目だ、遊べない

いやいや待て、何故弄る弄らないの考えが今出てくるのか。なんだ、俺も暇になつて

きているのか…………三人と一緒に走つてこようかな

「君は、なんであの三人に協力するんや？」

…………なんで？

「協力を頼まれたからです」

「本当に？」

「…………なに？」

おつと、ついタメ口に

…………しかし、どういう意味だ？

「ただのキツカケ、なんやない？」

「何が言いたいんですか？…………キツカケ、つてなんですか」

「この人何が言いたいんだ？キツカケ…………いや、キツカケも何も頼まれたから引き受けただけなんですけど

しかし、この含みのある言い方が気になる

「ふふ……それは自分でわかつとるはずやで」

「ええ、わかつてますよ。キツカケなんてわけわからんねえモノなんかありません。だけどあんたのその言い方が気になるんです」

「結構ストレートやね…………ま、今はいいんやない？自覚なんてなくとも」

「急にわけわかんないこと言い始めましたね……キッカケだの自覚だの」

副会长、友達からの情報ではもつとマトモそうなイメージがあつたんだがな……まあ人は見掛けによらないとはよく言つたものだ

「言つたやろ？今はいいって……わからんでもね」

そう言つた後、ほな、と言つて副会长は掃除に戻つていつた。一体なんなんだ……不思議な人だと言つてしまえばそれまでなんだがな。あの俺の中身を見透かしたような言

今度会うことがあつたら問い合わせてみるか。今日のところはもういい、少し整理が必要だ

「…………またやることが増えそうだ」

三人娘が階段を駆け上つてくるのを眺めながら、俺は溜息を吐いた

## 反省を活かす為に

朝練を終えて一旦各自家へ帰り、制服へと着替えて学校へ登校する。ついでだから一緒に登校しようと言われたので昨日と同じように他愛もないことを言つたり俺が高坂さんで遊んだりしながら登校した。なかなか有意義な時間でした

午前の授業中は目の前で居眠りしている孝太郎の椅子を何度も蹴つたり、外を眺めたりして過ごした。だつて目の前で寝てる時、なんあもぞもぞ動いてるから目障りなんだもん

しかし、春の気候は暖かい。窓側の席でなくとも暖かい日差しが当たるこの席ならばいい昼寝が出来そうだ。今現在昼休みだが、飯を食つたのでボーッとするだけでなく、昼寝にでも洒落込もうかなと弁当箱を鞄に片付けて外を眺めながら考える。確かに、この心地いい日差しを受けていれば寝てしまうのもわからんでもない

「…………」

そう言えば登校中に高坂さんが、掲示板の前にスクールアイドルの名前を募集する箱を置いたと言つていたのを思い出す。どれ、見に行つてみようと思い立ち上がると、何やら必死にノートに書き込んでいる孝太郎から声が掛けられる

「どこ行くんだ？」

「ちょっとそこまで」

孝太郎の質問に適当に返して俺は教室を出た

掲示板の近くまで来ると、箱の前に二人の男子が立っていた。今まさに一枚の紙を箱に入れようとしている。昨日の今日で一通あるかないか、特に期待もしてなかつたが、これならば態々見に来た甲斐があつたというもののだ

早速俺は目の前の二人に向かつて声を掛けることにした

「お前らが自らそんなことするなんて、意外だな」

「うえい!?」

しかし、すぐに返ってきたのは何か驚いたかのような声だつた。そんなに驚くことないと思うんだが……少し悪いことをしただろうか

「…………お、おつす総いつちゃん。そ、ソダネ～うん自分でもビックリしてるざますよ」

「…………？」

俺は変にキヨドリ始めた目の前の男子、白鳥 信一の様子に首を傾げる。普段から騒がしく行動の読めない奴ではあるが、こんな風に変に慌てる時は大抵何かやらかした時

だと記憶にある

「まさかお前……」

何か俺にとつて不都合になることでもやらかしたのか、その念を込めて信一に言うが、当の本人は明後日の方向を向いて両手を腰に当てて伸びをし始めた。誤魔化すのが下手すぎるだろ

「いや何、俺達も偶にはこう言つたこともしてみたくなるもんだ。ただの気紛れだ」

横から静かにそう言つたのは黒崎 和哉だつた。信一とは幼馴染みらしく、一緒にいるのをよく見かける。しかし性格はほぼ正反対と言つてもいいくらいで、共通しているところも少なくはないが……どこか子供っぽい信一に反して、大人のような余裕をいつも和哉は持つている。これが大人の男が醸し出す雰囲気という奴か。それに比べて信一は……たつたの5か、ゴミめ

反発が多いが、だからこそバランスが良いというか……どちらか片方だけだと変に暴走しそうだから出来るだけ二人でいてほしい

この二人は数少ない同じクラスの男子だ。スクールアイドルについて、和哉の方は興味がないらしいが、マネージャーをしていると話したら何か手伝えることは手伝つてくれるそうだ。これもその一環なのかな、友情とはなんと素晴らしいかな  
「…………そ、うか。まあありがとうな」

信一の反応は置いておくとして、箱を開けて中身を見る。そこには四通の折り畳まれた紙が入っていた。どうやらこの二人以外にも入れてくれた人がいたらしい。素晴らしい。この短時間で四通も入つてゐるなんて、皆スクールアイドルのことをキチンと認知してくれてるんだな

「お前達の入れてくれた名前が採用されるかはわからないが……採用されるといいな」

？  
そう言つて俺はまず一番上の紙を開け「そ、総一!? い、今開けんの?」……なんだ

「そうだけど?」

「…………いや、例の三人と一緒に見た方が良いんじゃないかな?」

「別にそんなの後でもいいだろ」

「あつ」

二人の言葉に構わず俺は紙の中身を見る

『超平和バスターズ』

……

何だ? 某アニメに出てくる名前が出てきたんだが、何かの見間違いか?

『野球をしよう。チーム名は……リトルバスターズだ』

バスターZ大好きかオイ。しかも二枚目にはご丁寧に台詞まで付いてんじやねえか  
『そんなどよりおうどん食べたい』

三枚目に至つては最早何の関係もねえ!!

「……………オイ」

俺は顔だけを二人に向ける。すると一人はゆつくりと、抜き足差し足忍び足で俺から遠ざかっている最中だつた。俺の声が聞こえたのか一人はゆつくりと顔だけをこちらに向け、そして走り出した

逃がすかボケエ!!

俺もほぼ同じタイミングでロケットスタートを切る。あいつら、絶対一回ぶん殴る……!!俺の感謝の言葉を謝罪の言葉と共に返しやがれ!!友情とはなんと素晴らしいかな、とか心の中で言っちゃつたよ!

「ギヤアアアア!!ターミネーターが襲つてくるううう!!」

「ででんでんでんでん」

「和哉お前楽しんでない!?」

ああ、是非ともこの手にショットガンがあるなら撃ちたいところだよクソ野郎共が上の階へ逃げて俺を撒くつもりなのか階段を駆け登る二人。その後ろになんとか食いついて奴らが階段を登り始めた後すぐに俺も階段へと足をかけた

「その階段に足をかけるんじやあねえ——ツ！俺は上！貴様は下だ!!」

「お前が下だ信一！お前が地獄の下にいればもうそれでいいツ！」

「こ」でネタを投下してくるとはなんという勇者なのか。周りに人もいるというのに、相変わらず場所を選ばないなあいつは……ノつてやろうではないか!!

「ザ・ワールド！」

俺がその名を叫んだ瞬間、信一は動きを止めた

ああ、こいつやつぱバカだわ…………でも最高だわこいつ

その隙に信一を追い越して階段の上まで駆け登る。踊り場に出た俺は信一の方を振り向き、そして気を付けをするように踵を付け、腰に両手を当ててポーズをとり、言った

「そして時は動き出す」

「はっ！…………お出ましかい」

「ほう……わかつたのか

パチ、パチ、パチと拍手をしてやる

「フフフフ、ひとつチャンスをやろう。その階段を二段おりろ。再びわたしの仲間にし  
てやろう。逆に死にたければ……足をあげて階段を登れ」

「…………俺にあるのは闘志だけだ。和哉の死が、俺の中からお前への恐れを吹き飛

ばした」

こいつ台詞覚えてないな。俺も覚えてるわけではないが、まあいいだろう。俺はDIOのような表情は作れないが、構わずに信一を見下ろしながら舌を舐めるてか、和哉死んでねえからな？お前置いて一人で逃げただけだからな

「本当に、そうかな？ならば…………階段を登るがいい」

俺がそう言うと信一は階段を二歩降りた

「…………」

うーん…………時を本当に停止させることが出来るんなら良いのにな

そろそろこの遊びも終わらせなければ周りの視線を集めているので終わらせるか

「死ぬしかないなポルナレフツ！」

そう叫んで階段を飛び降りながら信一に殴りかかった

「ちょ、飛ばし過ぎい!?」

「キングクリムゾンだ」

「DIOじゃねえのかよ!?」

くつ、避けたか流石目と反射神経だけはいいな！だがしかしままだ終わらんよ。振り向きざまに裏拳を叩き込むために体を回す。それを読んでか奴は既にしゃがんでいた。勘のいい奴!!

「やめろ、これは何かの陰謀だ！機関の妨害だ！奴らが俺達を戦わせる為に仕組んだ罠なんだ!!」

「取り敢えず殴らせろ、な？」

「な？じゃねえよ！てか割とマジで殴りにきたな!?」

「俺はお前を、信じてる」

「そんないい風に言われても!?」

ギヤーギヤーと喚く信一に対しシャドーボクシング。周りの集まつてきた女子も何だ男子が騒いでんのか、いいぞもつとやれと言わんばかりに集まつてきている。一部最後の問答でざわついたような気がするが気にしたら負けである

「覚悟はいいか？俺はできる」

「俺階段降りたのにいい！どいてどいて！」

「逃がしはせんよ」

くつ、階段の上へ行つたか!!

「コラア！廊下を走らない！！階段でふざけない！！」

うおつ？

「はいっ！」

信一を追い掛け誰かの怒声が俺達に降り注いだ。その声で周囲にいた生徒も蜘

蜘蛛の子を散らすようにどこかに逃げていく。こ、この声どこかで聞いたことあるんだが……。

「げえつ、絢瀬生徒会長……！ 東条副会长まで！」

案の定、聞き覚えのある声は生徒会長だった。信一の背中越しに見てみれば顔に怒りの表情を貼り付けてこちらを睨んでいる。その横では副会长がニコニコと何んでいるが、どうしよう。このまま後ろを向いて逃げ出してしまおうか。そうだそうしよう、信一を囮にすれば万事解決だな

「お、俺は悪くないんですよ!? 総一が追い掛けてくるから……！」

こいつ俺を売るつもりか！ ふざけんな同罪だろうがッ！ と心の中で信一に向かつて叫んだ。ブーメランとなつて返つてきそうな言葉であるがそんなものは知らない、知らないつたら知らない

「そんなことはどうだつていいわ。階段でふざけていたのも、廊下を走つていたのも事実でしよう？」

「お、おつしやる通りです……」

ははつ、ざまあないな。いや、まあ俺もなんだけど

「二年生になつて気持ちが浮ついているのはわかるけど、流石にちょっとはしゃぎ過ぎとちがう？ もうやつたらあかんよ」

「…………はい」

ううむ……確かに少しやり過ぎたか。まさか生徒会長と副会長が出てくるとは、わかつていたらあんなに遊ばなかつたのに  
 「大きく目立つたことは今回が初めてなので大目に見るけど、次はないわよ」  
 「すんませんでした」

俺と信一は二人に頭を下げて謝った。まあもうこいつを殴りたいとも特に思っていないし、何より注意されたらちゃんと止めないと。目を付けられたら何かと目の敵にされるかもしけん。それは面倒だ……

「それとあなた。宮野君、だつたわね」  
 ん？俺？

「あなた、そんな風に遊んでる暇なんかあるの？廃校を阻止する為にスクールアイドルのマネージャーをやるということは、あなたもこの学院の存亡に関わっていると言つてもいいのよ。少し甘く考え過ぎてるんじゃないかしら」

…………これはまた痛いところを突かれた。そんなことはない、と言い返したいところだが、今の状況で言つたところで説得力皆無か

「…………」

「何か言つたらどう？」

「いえ、おっしゃる通りですね」

正直言つて、何も言い返せない。こればっかりはどうも自分としては一応、現在やれるだけのことはやつていいつもりだ

練習は野球部の頃にしていたのを引っ張ってきたやつのやり方を昨日纏めたし、今日の朝から決めたことだが、園田さんの作詞の手伝いもすることになつている

正直言つて詩なんて授業で書けと言われて適当に書いたぐらいだから戦力になるかと言われば微妙だろうが、詰まつたら何かヒントくらいはあげれるかもしれない。今週の土曜日にあるA—R—I—S—Eのライブでは、何か盗める技がないかどうかを探つてみるつもりだし……

…………やめよう、何だか言い訳をしてる気分だ。いや、紛れもなく言い訳なんだろうまだやるべきことはあるはずだ。昼休み放課後と関係なく、本気で廃校を阻止する為に活動するというのなら、こんなところでふざけている場合でもなかつたのかもしれない

い

「…………誰かの手助けをしようという気持ちは評価するわ」

会長は腕を組んで続ける

会長の一字一句が重しのようにのし掛かる感覚。これから何を言われるのか、想像してしまふと少し恐ろしい

だが、聞いておかねばならない

爺ちゃんが昔言つていた

『怒られた時は反省しなさい、そして次に活かしなさい。失敗を糧に出来なければ、何も成せないまま終わつてしまふよ』と

何も成せないまま終わつてしまつて良いわけがない。彼女らは廃校を阻止する為にアイドル活動を始め、俺はその手伝いをしているのだから

『廃校を阻止すること』を『成し遂げなければ』ならないのだから

『けど、よく考えてちょうどいい。さつきも言つた通り、これは学校の存続を掛けた問題……『頑張つたけど出来ませんでした』じゃ駄目なの。甘い考えを持つたままならやめてちょうどいい』

……………そうか、俺はまだ甘かつたのか

会長の言葉をしつかりと受け止める

そうだ、これは学校存続の問題なんだ。廃校阻止だなんだと言いながらそこをキチンと受け止めていかつたのかもしれない

これは大きな問題だ。それ相応の覚悟を決めないと

「……………」

拳を握り締める

反省して、次に活かせ。友達と追いかけっこしてゐる場合じゃない

「…………ちょっと、言い過ぎじゃないですかねえ会長」

「やめろバカ」

見兼ねて助けようとしてくれたのか信一が一步前へ出て会長に突つかつた。それは手で制する。折角人が横で覚悟完了していたのに……まあ、嬉しくもあるが。ほら、会長がお前の方も睨んでるじやないか

信一は不満そうに退がるのを尻目に会長に向き直る。後ろ側に和哉の姿が見えたが今はスルーだ。あいつ後で文句言つてやる

取り敢えず今は、この場を収めるしかないな

「会長、すみませんでした」

「え……」

俺はゆっくりと頭を下げた

「確かに会長の言う通り、俺は甘かつたのかもしれません。…………俺も普段ならここにいるバカのように、少し言い過ぎじゃないかと食つて掛かつたかもしれない。けど、今回は事が事だけに、俺も納得せざるを得ません」

「じゃあ……」

「だから、これから真剣になります。もう甘い考えだと言われないようにします」

会長は俺がやめると言いだすと思ったのだろうか。俺の言葉に僅かに目を見開いた

「貴方は何もわかつていなーいわ」

「何がですか」

「失敗したら終わりだと言つて いるのよ」

「なんだそんなどか

「それは全てに対し 言えること で しよう?」

何に対しても、『頑張ったけど出来ませんでした』が通用しないのなら同じはずだ

「私達は そ う な ら ない 為 に 動 いて る の 」

「俺達だつて 失敗するつもりはない」

「それがわかつていないと『♪♪♪♪♪♪♪♪』

昼休みの終わりを告げる5分前の予鈴が、会長の言葉を遮つて廊下へ鳴り響いた  
「…………早く教室に戻りなさい」

「ほな、バイバイ」

言葉を遮られた会長は不機嫌そうに そ う 言つて 跡を返す。それを副会長が追い掛け  
て行つた

「…………」

会長は何で俺が何もわかつていないと い う の だ ろ う か?

失敗すると終わり…………そうならないようには生徒会は頑張っている。廃校の知らせがあつてから数日、未だにアクションを起こしている様には見えないが、会長の言う『失敗しないため』の策略を練つてゐるのであれば納得はいく

俺もそれに習おうと言つてるんだ

既にスタートしたからと言つて遅くはない。逆に言えば始まつたばかり、手遅れになる前に会長に忠告を貰つて良かつたと思うくらいだ

「総一、俺達も教室に戻ろうぜ」

「……ああ」

思案していると信一に肩を叩かれた。俺もそこで考えるのをやめ、信一と教室へ向けて歩き出した

途中自然な動きで和哉が並んだので二人で一発殴つた

余裕な表情で受け止めやがったのが非常にムカつきましたまる

「ふ…………」

その日の晩、両手に持った某レンタル店の袋を机の上に置いて中身を取り出す  
中身は全てアイドルDVDだ。あとCDも少々

「何かの参考になるかと思つてこれだけ借りてきたのはいいが…………どちら見たもん  
かね」

今日は放課後、三人の練習に付き合い、飲み物を渡してから別れた俺は懶々家に帰つ  
てから、自転車でDVDをレンタルに疾走。取り敢えずアイドル物を右から左に幾つか  
借りてきた

見たり聴くだけでも何か参考にならないかと思つたからだ

DVDを一本取り出してセット

「どれ、今日は久しぶりに徹夜するか」

俺はテレビの前に胡座を搔き、スイッチを押した

# 徹夜明けの朝はキツイ

「…………」

空を仰ぎ見れば本日は晴天なり。春だというのになんだこの天気は、地球温暖化恐るべし。そこまで暑いというわけじやないが、徹夜明けの俺にとつて、今現在陽の光は天敵にも等しい存在である。ぐふあ、眩しい

早足で学校へ駆け込むと、下駄箱の前で孝太郎と出くわした。今日は朝練には顔を出さなかつた。別に俺がいてもいなくとも変わらないだろうから、今日は休むと言つた風に連絡をした。後で高坂さんが理由を問い合わせただしてくるだろうが、この顔を見れば察してくれるだろう

「おう、おはよう総…………隈が凄いぞお前。初めて会つた頃みたいだ」

俺に気付いた孝太郎が片手を上げ、少し驚いた表情を作つた

「ああ、おはよう。徹夜明けだ。懐かしいだろ？」

今、俺の目の下にはくつきりと真っ黒な隈が出来てゐる。今にも寝落ちしてしまいそうな程眠い。入学したばかりの頃は一週間に二度のペースで徹夜していたが、最近ではめつきりそれもなくなつていた

「いや、見てて良いもんじやないぞ」

解せぬ

「どした、久しぶりに徹夜でアニメか?」

「いや、ちょっとアイドル系の動画を」

「へえ……流石スクールアイドルのマネージャー」

肩を叩き、からかうような聲音で言つてくる孝太郎の手を払う。間違いじゃないが、顔が腹立つ。肩を並べて廊下を歩き、後ろから走つて肩を組んできた信一をあしらつて教室へ辿り着いた

戸を開け中へ入ると三人娘が目に入る。高坂さんが俺に気付き声を上げ、走り寄つてきた。今日朝練に参加してないからな、絶対なんか言われる

「今日なんで朝練来なかつたの!……つて、隈が凄いよ!」  
ほらな

迫つてくる高坂さんに、体勢を若干仰け反らせる。孝太郎は俺を見捨て席へ向かつた。薄情な奴だ

「まあ待て高坂さん。今日は休むという旨は伝えただろ?」

「休むって言つただけじやん!? 理由聞いてないよ! どうせアニメ見てたんでしょー! だからそんな隈付けてるんでしょ!」

まあそう熱くなるな。君は誤解してるんだよ

「いいか高坂さん。そうやつて何事も決め付けるのは良くないことだ。きちんと物事を確かめた上で判断しなければ駄目な大人になつてしまふぞ」

「あ、ごめんなさい」

うむ、わかつてくれたようで何より

「惑わされてはいけませんよ穂乃果。良い事を言つているようですが、明らかに話を誤魔化そうとしています」

折角誤魔化せたと思ったのも束の間だつた。園田さんめ、余計なことを言つてくれる。恨みを込めた視線を送るが睨み返された。何ある人怖い。大和撫子が鬼になつてしまつたようだ。もしかしたら園田さんも俺が休んだ理由を知りたいのだろうか

「アイドルについて勉強しようと思つてな。DVDとか、CDとか漁つてたんだよ。徹夜でやつてたから隈が出来たんだ。オーケー？ アンダスタン？」

「そうだつたんだ……」

説明中にやつてきた南さんも含め、三人とも納得の顔をした。結局のところ行く気力がなかつただけなんだ。是非もないね

納得したようなので俺は自分の席へ向かう。眠い、非常に眠い。席に座つた俺は頭から突つ伏した。あー、冷たくて気持ちいい。瞼を閉じれば眠気がゆっくりと押し寄せて

くる。一限目が始まるまではぐつすりと眠らせてもらおうか

……ああ、でも用意だけはしておこう

そう思いゆつくりと目を開ける。すると目の前には高坂さんの顔が。何故か知らんが真剣な顔でこちらを見つめている。なんだこいつ（無表情）

「…………」

暫し見つめ合うが…………なんだこの状況。目が合ってる分お互い離すことが出来ない状態になつていて。俺が何かしたんだろうか？それともさつき誤魔化そうとした仕返しか。高坂さんと見つめ合いながら暫し考えるが、やはりわからん。段々相手の顔が赤くなつていて。顔を赤くするくらいなら早く止めればいいのに

「せいや」

「いたつ！」

取り敢えず高速でデコピン食らわして体を持ち上げた。机の横から離れて額を押さえる高坂さんを尻目に鞄から教材を取り出し、机の上に置いた。そして突っ伏す

「人の寝顔を見ようなんて、なかなか趣味が悪いな」

本当のことはわからんが、そう一言だけ告げて腕を枕にする。そしてもう一度瞼を閉じた

「いたたた……」

教室に穂乃果の声だけが聞こえる。普段ならばこの時間帯は、朝登校してきた友達と挨拶を交わし、昨日見たバラエティ番組などの話をするのが普通である。だが、今現在はそれが違つた

教室中の全ての人間が、机に突つ伏して寝ている総一に目を向ける

別にクラスメイトが机に突つ伏していようが、何をしていようが、気にせず友達と談笑するのが普通である。ただ寝ているだけなら、気にするようなことは何もない。そもそも朝の過ごし方の一つであるし、他にも突つ伏して寝ている人間はいる。気にすることはないはずなのだが、如何せん、寝ている人物が問題だ

宮野 総一と言えば、意外にもこの学校の二、三年生には有名なのである  
いや、総一だけではない。この学校に在学する二年生男子は、全員が全員、知らない女

子生徒はいない程名が知れ渡っている。今年入学した一年生はまた別であるが

何しろこの学院が共学化をして一番初めの男子生徒達だ。更にその上、騒がしい。違うクラスである青木 弥生を筆頭に、去年この学院で行われたイベント毎に騒ぎに騒ぎまくつた男子共だ。去年の新入生歓迎会などは、三年生に言わせれば『バカ達の祭宴』とまで名付けられた程である

具体的には男子10人で部活動を見学して周り、荒らしに荒らしまくった  
と言つても、本人達に自覚はない。普通に見学しに来て、自分の色を出していただけ  
である

しかし、男子共はどいつもこいつも曲者揃い。そんな男子共が色を出せば、それも10人がそんなことをすれば真っ黒になる。つまりカオス

見た目は良い方だがそれに惑わされたら即負ける。初めての後輩男子、部員に加えようと見学に誘う女子勢は悉く、悉く男子共の馬鹿騒ぎについていけなかつた

挙げ句の果てには自分達で部活を作ったのだから、マジふざけんな、と前生徒会長が漏らしたのは仕方のないことだつたのだろう。何故か生徒会に苦情が來たらしい

原因はそれだけではないが、それから男子共の名が知れ渡つていくのである

その中で、総一はシンプルにも『鉄仮面』として知れ渡つている。無表情、何をして  
も無表情

『鉄仮面だよね』『無表情だよね』『あれ、楽しそうに話してる。もしかして笑つて……』『無表情だわ』『なんか怖い』『声のテンションと顔が合つてない』とは女子達が言つていた言葉だ

しかも、無表情以外他の生徒は見たことがない

つまり、だ

『無表情以外が、なんでもいいから見てみたい…………!!』

クラス全員の、一年生であつた時から続くちょっとした願いである

それは穂乃果であろうと同じだつた。だからせめて、寝顔はどんな感じだろうかと確かめようとしてデコピンをくらつたのだつた。女子に手をあげるなんざサイテー、キヤー、と後ろで馬鹿な男子が言つているが誰も気にしない

そして、視線の最中にいる本人は気にはせず寝るだけ

「…………え、何この空氣？」

ガラリと音を立て、教室に入ってきた先生の反応は当たり前のものなのだつた

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「はい、もう一本。次で最後だ、気合入れろ」

手を鳴らすと三人娘は階段を駆け上がり始める。そろそろ今日のノルマも達成だ。  
背中に背負つたりユツクサツクからスポーツドリンクと紙コップを取り出す

「お、終わつたあ」

「もうヘロヘロ……」

高坂さんと南さんが地面にへたり込んだ。その二人にドリンクの入った紙コップを手渡す。間延びした声で礼が返つてくるのを聞き、それに対しゆっくり飲むよう告げる

そして園田さんにも紙コップを渡し、疑問を口にした

「園田さん、作詞の方はどうなつてる？急かすようで悪いが、残り約一ヶ月しかない。何かわからないこととか、必要な資料があれば用意するが」

「い、いえ、そこまでして貰わなくても大丈夫ですよ。それに、作詞の方は大まかにはできてるんです」

「…………」

「え、今なんて？」

「…………え、今なんて？」

思わず心にある事をそのままに射出してしまつたじやないか

てか、なんて言つた？大まかにはできる？

「気になる部分はあるんですが、大体できます」

なんだろう、心なしか園田さんの顔がドヤ顔に見える。しかし、あまり自分の功績を自慢するような人間ではないので、やはり気のせいなのだろう。なんだこの有能少女、怖い。歌の歌詞をたつた数日で、大まかとはいえてるなんて…………き、基準がわからん分余計に混乱するう！いや、まさか大まかつてのはアレか？こんな作ろうと思つてるけどまだ歌詞はできてないんですけど、そんな感じですか？

「そ、そうか。何かわからないことがあれば、協力するぞ」

「その……歌詞を見られるのは、恥ずかしいので」

見ていて可愛らしくはあるが、何故恥ずかしがる。どうせ皆に知れ渡るのにな。一步

踏み出す勇気つてのが大切だと思うんだよ俺は「まあ、どうせ聞くことになるんだしいいんだが……そうだ南さん、衣装の方はどうだ？」

首を回して、地面に座り高坂さんと話をしている南さんへ話しかける。話しかけて思つたが、たつた数日では進んでるも何もないか。どんな衣装を作るかとか、そこから考えなければいけないからな。悩んでいるようなら、徹夜で見たＤＶＤのアイドル達の衣装から良さそうな部分を拝借したりとか、協力できるはずだ

「うん、どんなのを作るかは決まつたよ」

「そ、そうか」

うちのアイドル達が有能すぎる件について

なんだ、これでは俺が空回りしてるみたいじゃないか。マネージャー必要としてなくね？いる必要がなくね？どうしよう、悲しくなってきた。もう俺つて何もしなくていいんじやないだろうか。俺だけ何もしてな……

「ん？ なに？」

高坂さんを見ると口に咥えていた紙コップを手に持ち、首を傾げた。そんな彼女に俺は左腕で親指を立てる

「仲間だな、高坂さん」

何もしない仲間!!

「なんか嫌な仲間にされてる気がする……」

仲間宣言したのに何故か唇を尖らせて嫌な反応をされた。失礼だろ、おい。失礼な反応だつたので、左腕をデコピンの形にしてやると、高坂さんは肩を跳ねさせて額を押された。そのままジリジリと牽制しあつていると、南さんから「そんなことしちゃめつ、だよ」と言われたので敬礼をしてからやめる

「まあ、順調に進んでいるようで何よりだ」

順調通り越してのうな気もするが

陽が沈みかけている空を見上げる。本当に順調だ。まだ始まつたばかりだが、少し不安だな。作曲を頼む一年生に早いところ話を付けておくべきか。そして生徒会長から目の敵にされている現状…………あれ、結局プラマイゼロ？

ならば早速明日にでも後輩ちゃんに…………ああ、明日は土曜日か

「明日のことだが…………」

「穂乃果の家に集合ですよ」

「いや、俺は行かないが？ A—R I S E のライブに行くからな」「え！」

高坂さんが驚きの声をあげる。それを聞き、言つてなかつたかな、と視線を上に上げて記憶を探る。うん、言つてなかつたわ。これは悪いことをした

「いやあ、この前アキバでチケット貰いまして。これは見に行かねばならないなど」

あれだ、敵情視察?

「…………それは、練習よりも大切なことですか?」

園田さん、その笑顔はダメだ。ガラにもなく縮み混んでしまいそうじやないか。徹夜明けの朝方ならば俺の口から魂だけが逃げ去つてしまいそうだ。学校で寝たから問題無いが

「ま、まあ落ち着け?園田さん。貴い物だからな、それを無下にもできないだろ?それに考へてもみろ、敵情視察だ。映像で見るよりも生で見た方がわかることがあるだろう。な、そうは思わないか?」

「宮野君が珍しく焦つてるね、ことりちゃん」

「あ、あはは……でも無表情なのは変わらないね」

おいそこ二人、内緒話してるんじやない。助けてくれ、お願ひだ。ドーナツあげるから、ポンデリング奢つてあげるから、ついでにカルピスも付けよう  
「…………まあいいです」

「お、おう……」

許してもらえたようだ。本人は納得がいってないようだが、ライブに行く理由としては本当に言つた通りなんだ。他意はない。しかし、やはり口だけでは伝わらないこともあるもんだ。人間とは難しい生き物である……お、哲学っぽい

「日曜はきちんと参加するさ。明日は色々と研究してくるよ」

「では、成果を持つて帰つて来てくださいね」

そう言われると変にプレッシャーが掛かるんだが

「ああ、穴が空くほど見てくるさ」

だがまあ、彼女の期待に応えられるように頑張ろう

そう思い、もう一度夕陽にやつた

「宮野君、その発言はちょっと……」

「変態みたいな発言だつたよね」

「え……」